

第1章 内子町の歴史的風致形成の背景

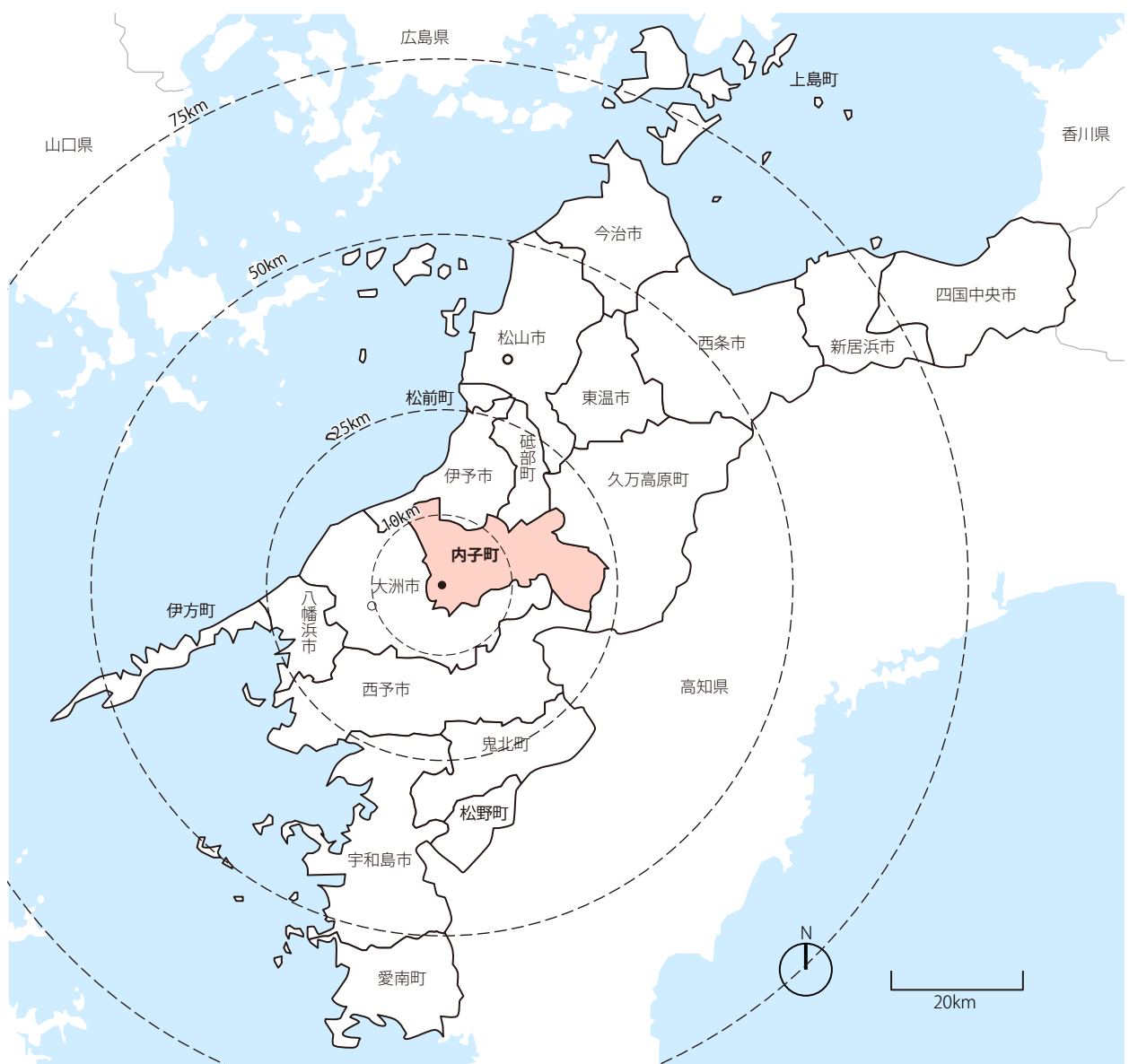
1. 自然的環境

(1) 位置

内子町は、愛媛県のほぼ中央に位置し、県都松山市から約40kmの地点に位置する。松山市からはJR特急で約25分、高速自動車道でも約25分で中心市街地に到着する。東部は久万高原町、北部は砥部町および伊予市、西部から南部にかけては大洲市、南東部は西予市とそれぞれ

接している。

総面積は299.43km²で、東西30.0km、南北17.9kmにわたって広がっており、町の中央部を一級河川・肱川の支流である小田川が流れている。地形は、平坦地が少なく、ほとんどが山地および丘陵地となっている。



内子町の位置

(2) 地形・地質

四国山地の豊かな森林に囲まれた愛媛県西部の内陸部にあり、県内最大の清流肱川水系流域の支流である小田川沿いにできた小さな盆地（内山盆地）の盆地床（沖積低地）に市街地が形成されている。市街地は丘陵地と河川に囲まれた良好な自然的環境を呈している。内子地区と五十崎地区の間には丘陵が残っているため、それぞれ内子盆地、五十崎盆地と分けて呼ぶことも多い。

□内子地区

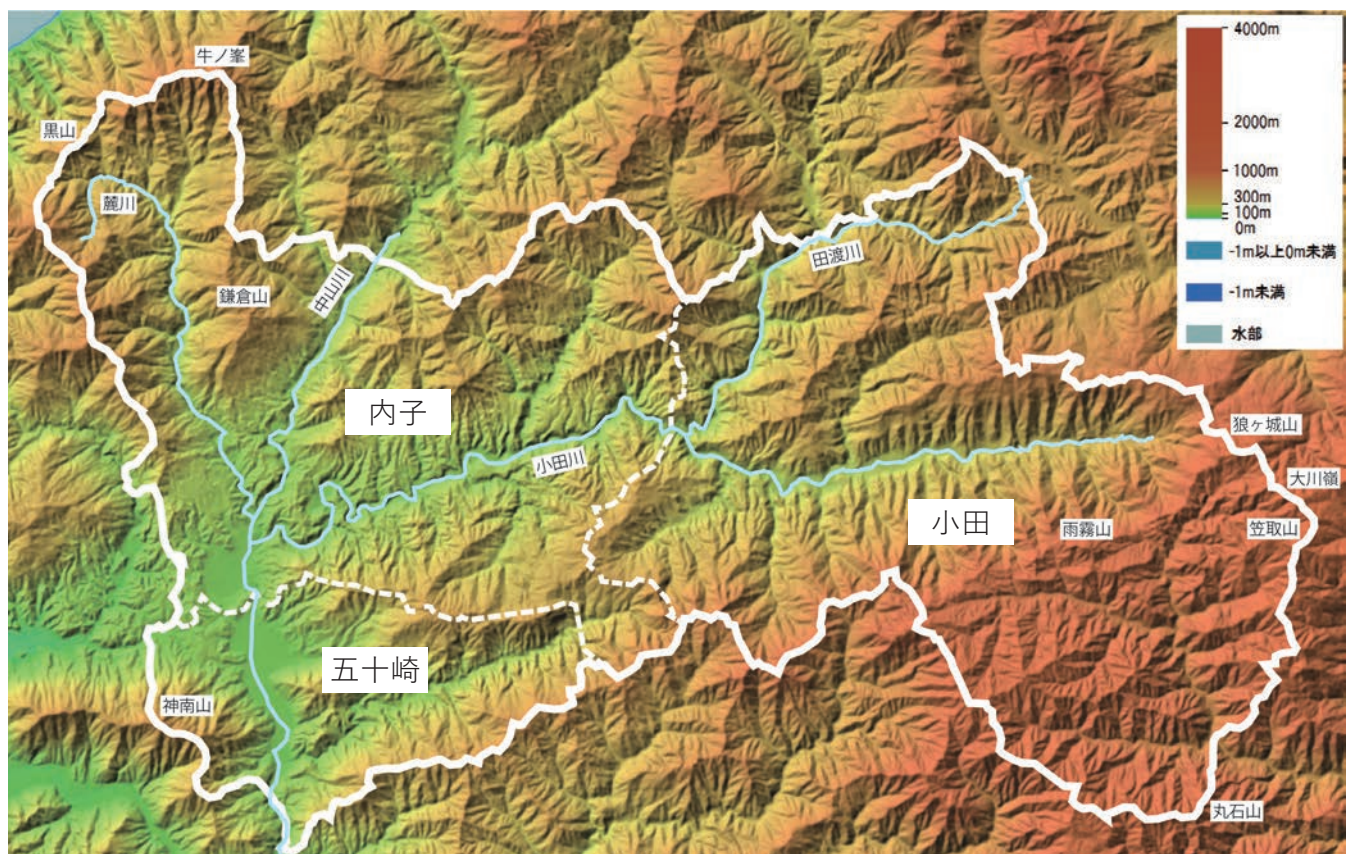
内子地区の中心市街地周辺は低い台地などが配置された凹地となっており、小田川本流・支流の合流地点右岸に位置する。小田川の氾濫を避けるため、中心市街地は低い段丘群の上である低い台地面か、地上げされた新国道沿いに発達してきた。都市的産業のほとんどが盆地内の市街地（中・低位台地）と周辺山村の幹線道路

沿い（谷底低地）に集積している。それ以外の産業としては、高位台地群の山腹斜面に段丘上に果樹畑や水田などが集散して位置している。

内子地区の地質は、南東部の一部を除いた地区のほとんどが三波川帯に属しており、地滑りの多発地帯としても知られている。淡い緑もしくは濃緑色の緑泥片岩が北部を中心に広範囲にわたって分布していることも特徴となっている。一方で中心市街地をはじめとする南西部は洪積層の礫層が分布しており、円礫が残されていることから小田川の洪水の際に上流から運ばれてきたと考えられる。

□五十崎地区

五十崎地区の中心市街地は中心を小田川によって二分されており、内子地区同様に主に小田川の氾濫を避けるために人工堤防裏の沖積地内に立地している。農業は、一部耕地が小田川



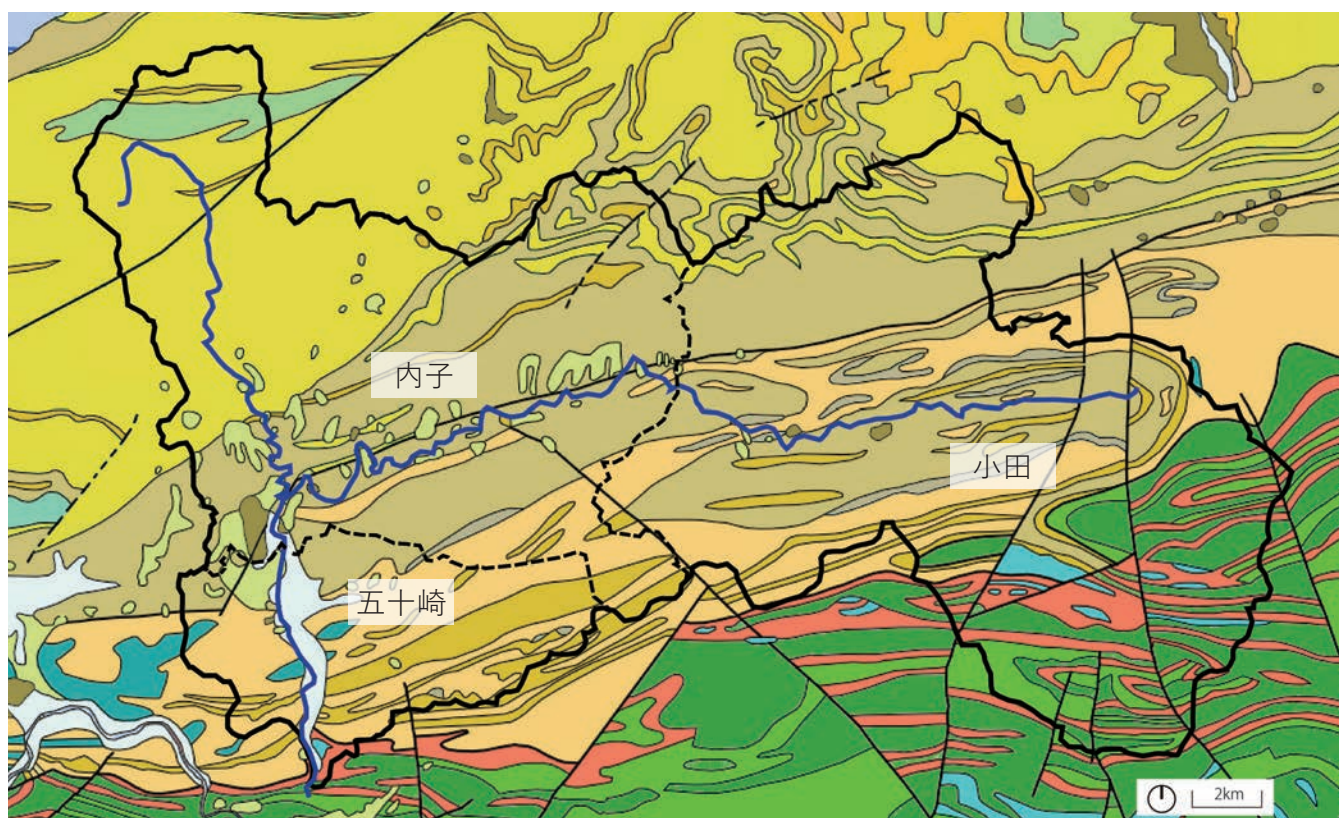
内子町域の標高区分図（国土地理院基盤情報地図サイト HP より作成）

の両岸に広がる平坦部に存在するほかは、山腹斜面に段丘状に開かれている。

五十崎地区の地質は、秩父帯と三波川帯の境界である御荷鉾線を北端としてほとんどが秩父帯に属するため、緑色片岩や黒色片岩、珪質片岩を主とする。

□小田地区

地区の中央を小田川が流れ、川に沿って道路や耕地、民家が点在する純峡谷型の地形を有している。標高 600m 以上の土地のほとんどは山林となっており、地区の面積のうち、9割を林野が占める。南東部を占める小田深山は 4,500ha にわたり国有林を有する森林地帯と



- 10Hsr：後期更新世 - 完新世 (H) の海成または非海成堆積岩類
- 23Q3tm：工期更新世 (Q3) の中位段丘堆積物
- 430J1-3ax：前 - 後期ジュラ紀 (J1-3) の付加コンプレックスの基質
- 437J1-3ab：前 - 後期ジュラ紀 (J1-3) の付加コンプレックスの玄武岩ブロック (石灰紀 - ペルム紀)
- 438J1-3al：前 - 後期ジュラ紀 (J1-3) の付加コンプレックスの石灰岩ブロック (石灰紀 - ペルム紀)
- 439J1-3ac：前 - 後期ジュラ紀 (J1-3) の付加コンプレックスのチャートブロック (石灰紀 - 中期ジュラ紀)
- 553Jav：ジュラ紀 (J1-3) の苦鉄質火山岩類 (付加コンプレックス中の岩体)
- 826N2vf：中期中新世 - 工期中新世 (N2) の非アルカリ珪長室火山岩類
- 1598M9plx：三波川変成岩類 (弱変成相)
- 1599M9plm：三波川変成岩類の泥質片岩 (弱変成相)
- 1620M9plb：三波川変成岩類苦鉄質片岩 (弱変成相)
- 1620M9pll：三波川変成岩類の石灰質片岩 (弱変成相)
- 1631M9plc：三波川変成岩類の珪質片岩 (弱変成相)
- 1640M13plb：御荷鉾緑色岩類 (苦鉄質岩部)

内子町の地質図 (資料：国立研究開発法人産業技術総合研究所 地質図 Navi より)

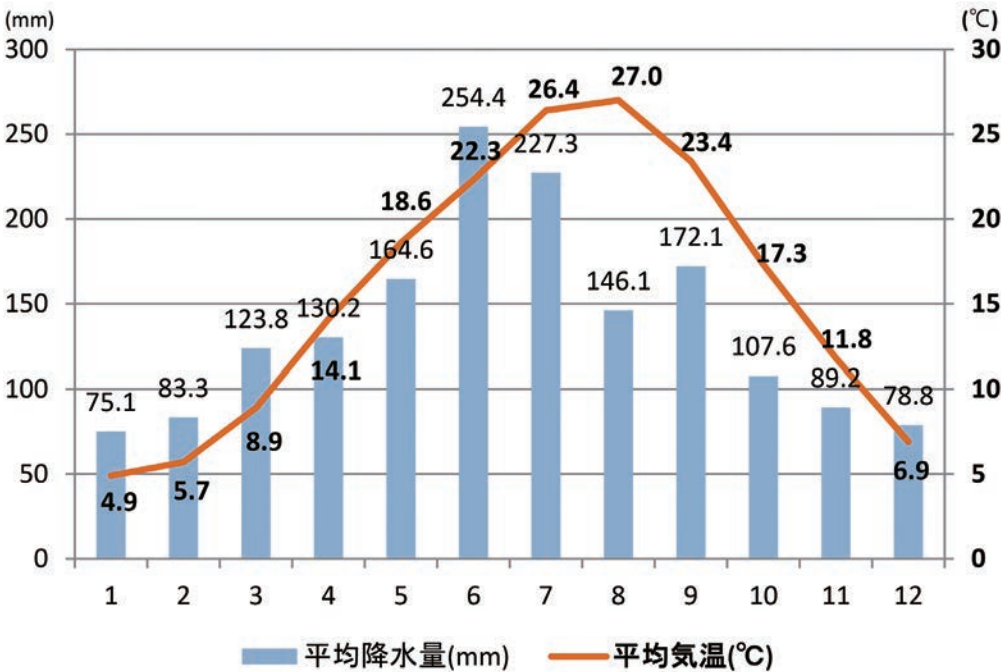
なっており、原生林や豊富な溪谷美を作り出している。地区全体の傾向として標高が高く、年間を通して気温が低いため、農業にはあまり適さず、林業が主産業となっており、地区内の山林にはヒノキやスギの木が多く育つ。わずかに小田川沿いに水田が存在しており、そのほとんどが斜度 20 度以上の急傾斜の段畑となっている。

小田地区の地質は大部分が秩父帯に入り、北部の御荷鉾線沿いには変成した岩石も多く、複雑な地層を示す。小田川沿いは中生代に泥が堆積した泥質片岩などの変成岩を主として見ることができる。南東部の小田深山は町内でも古くに形成され、玄武岩やチャートが多い。

(3) 気象

若干寒暖の差がある内陸性盆地特有の気候特性を示す。年間平均気温は 15.6℃と温暖ではあるが、温和な気候の多い愛媛県その他都市と比較すると年間を通した気温差が大きく、比較的厳しい土地柄となっている。また、年間平均降水量は 1,648.8 mmと松山市と比較しても多く、気候の特徴の一つとして湿潤性を示し、耕作に適した地域である。

肱川水系に位置する内陸盆地は晩秋から初冬にかけてしばしばいわゆる放射霧（夜間の放射冷却によって地表に接する空気が冷却されてできる霧）である朝霧に包まれる。高湿度や夏の高温が肱川流域の特産である農産物（例えばシイタケ等）の生育を促す好条件となっている。



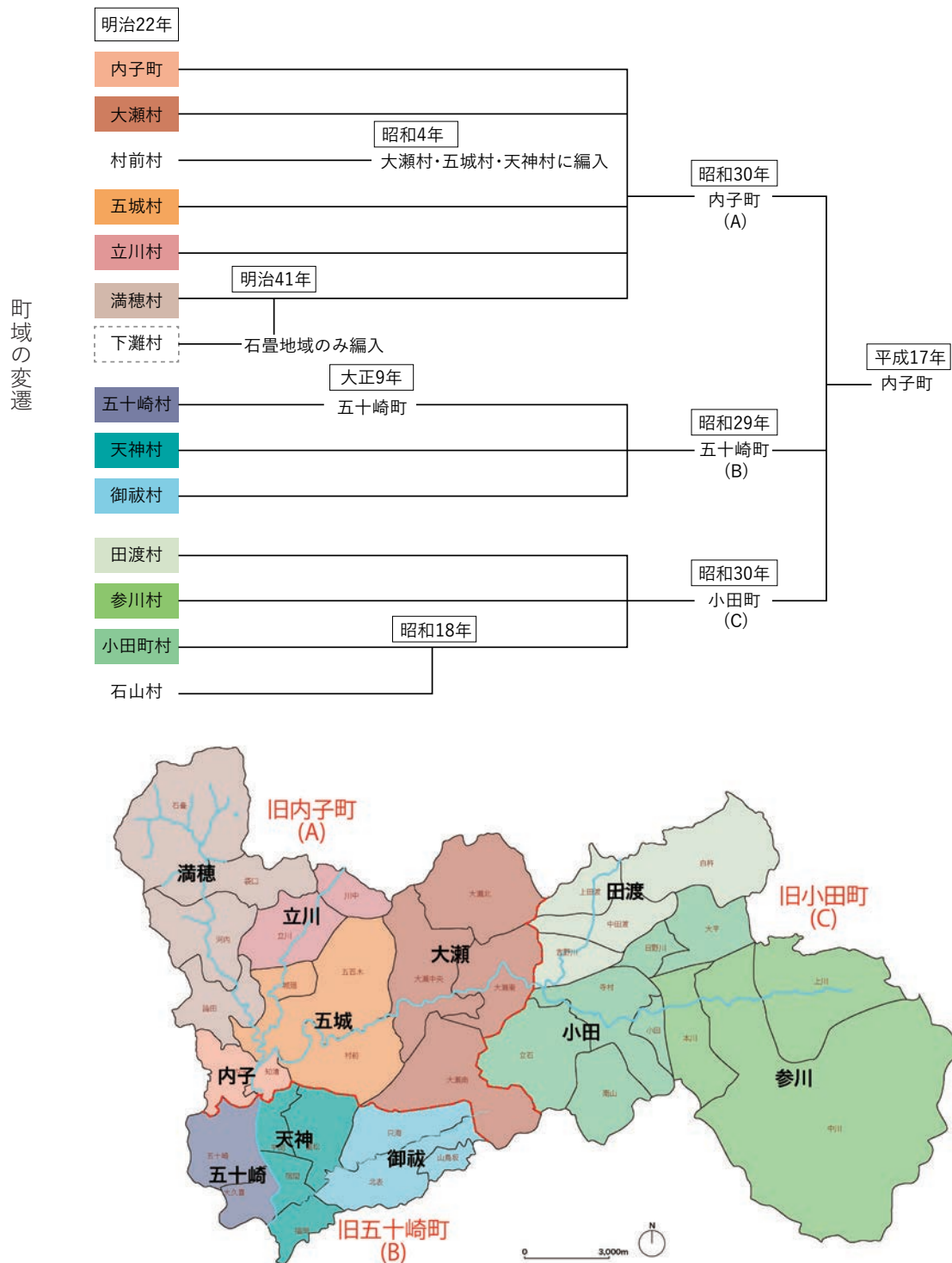
平均気温・降水量（1981 - 2010、観測地点：大洲）（気象庁より）

2. 社会的環境

(1) 町の変遷

昭和 20 年代の後半は町村合併促進法により全国的に市町村合併が推進されており、旧内子町と旧五十崎町の属する喜多郡では 26 町村が 1 市 3 町 2 村に、旧小田町の属した上浮穴郡でも 11 町村が 2 町 5 村に集約された時期で

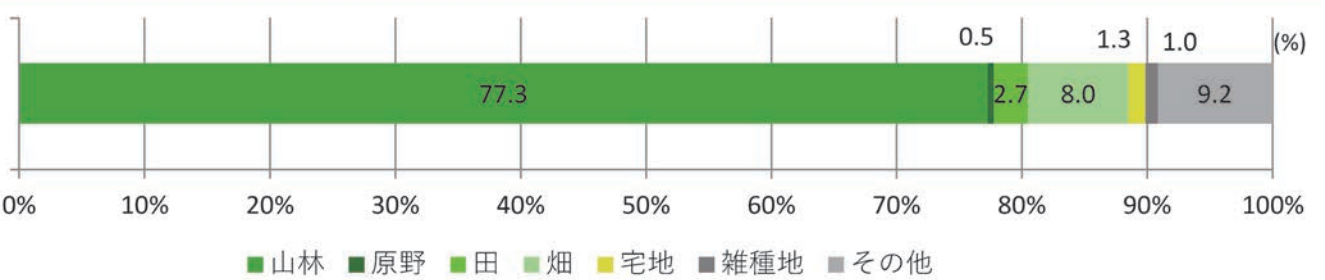
あった。そういった中で昭和 29、30 年 (1954、1955) にかけて誕生したのが、現内子町を構成する旧内子町、旧五十崎町、旧小田町である。さらに平成 17 年 (2005) には上記 3 町が合併して現在の内子町が誕生した。



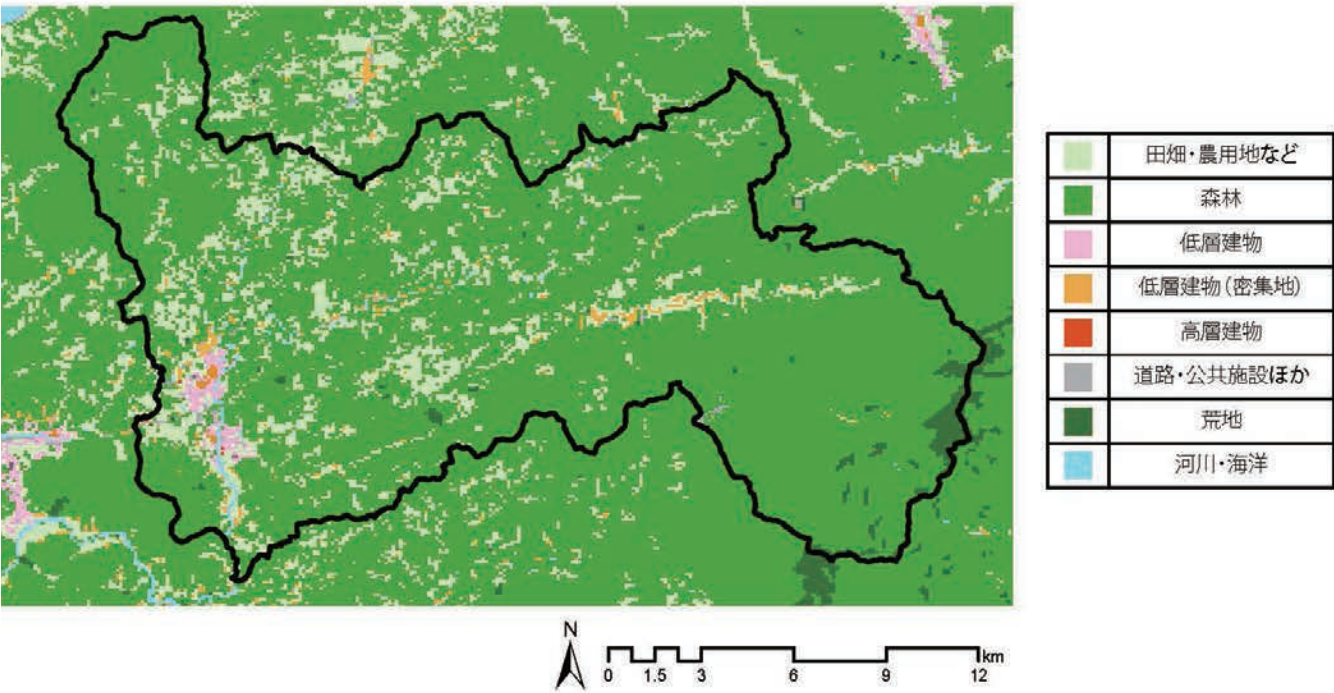
(2) 土地利用

内子町における平成 29 年 (2017) 時点の地目別土地面積を見ると、町域の全体面積約 299.43 km²に対して、宅地が約 3.95 km²、山林が約 231.24 km²、原野・雑種地が約 43.40 km²、田畑約 32.87 km²などとなっており、約 77% を山林が

占める山間地域である。内子地区が町全体の人口の半分以上を占める。また内子町は内子地区と五十崎地区を中心に町の一部である 978ha が都市計画区域に指定されている。



内子町の土地利用状況の割合 (2017 年度)



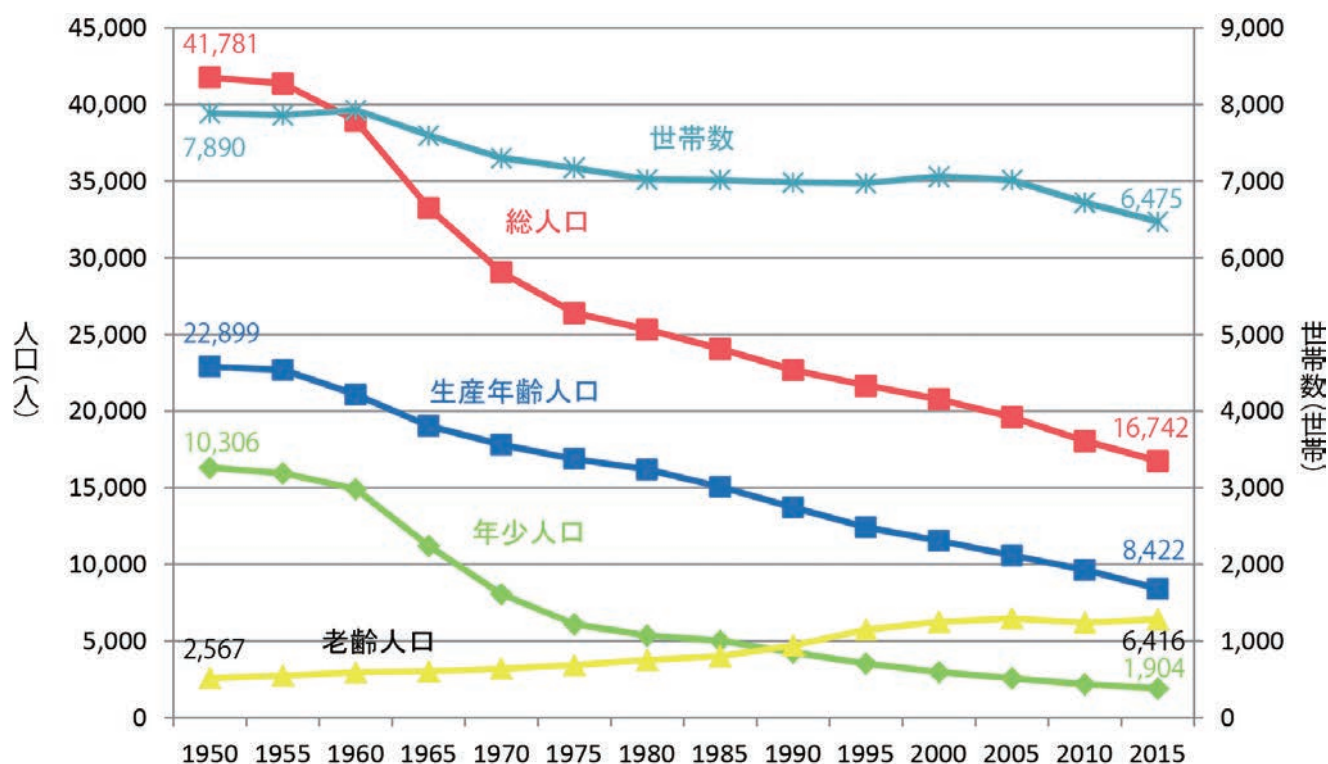
内子町の土地利用 (国土情報地図より)

(3) 人口動態

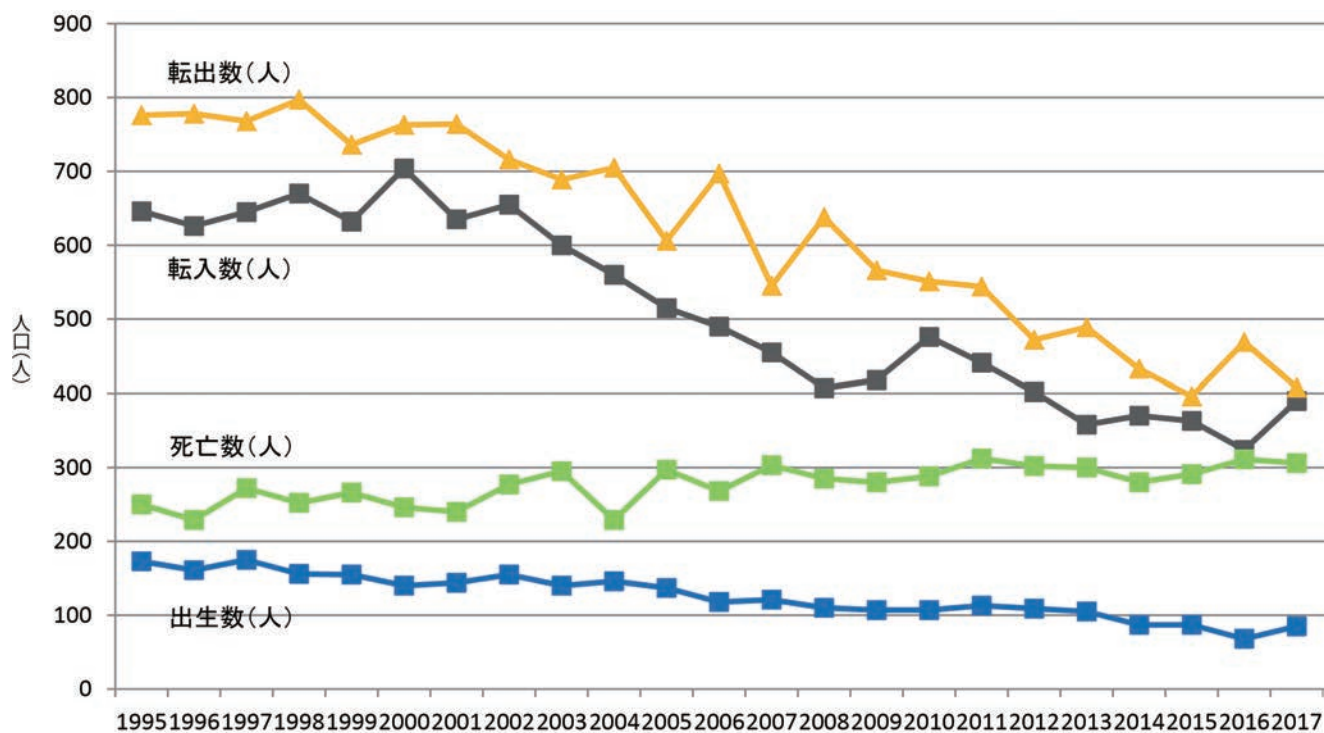
内子町は、平成 30 年 (2018)7 月現在、住民基本台帳によると人口 16,767 人、世帯数 7,185 世帯となっている。戦後人口が急増し、昭和 25 年 (1950) には約 4 万人とピークを迎えたが、それ以降は一貫して人口減少に転じている。一方で内子町の高齢化率は約 38% となっており、愛媛県平均・全国平均よりも大幅に高くなっている。内子町では、1990 年代後半までは平均余命の延びを背景に、死亡数はそれほど増加しなかったが、平成 2 年 (1990) 以降、死亡数が出生数を上回る自然減の状態となった。近年はさらに出生数と死亡数の差が大きくなってきて

おり、より人口減少が進んでいる。一方、年度ごとの転入・転出数は、総人口の減少に伴って減少してきてはいるものの、ほぼ一貫して転入よりも転出が多い、社会減の状態が続いている。したがって人口減少の傾向はこの先も続くことが予想されている。

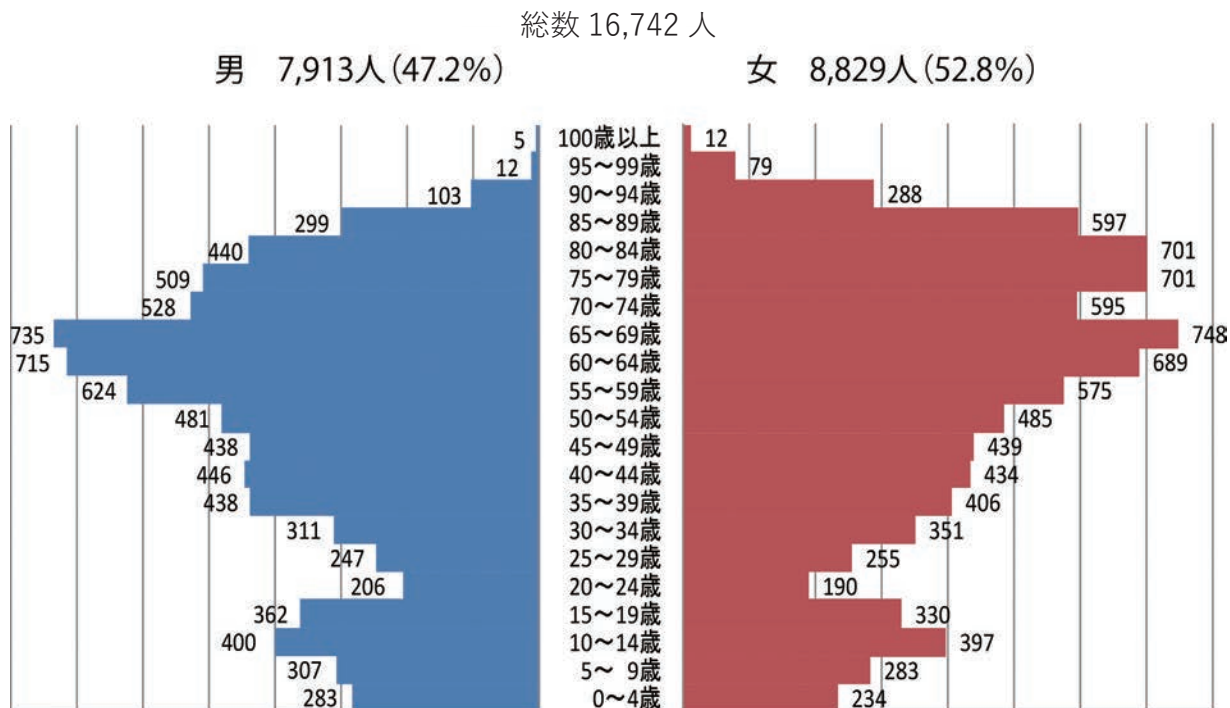
人口ピラミッドをみても、高齢人口が多く、年少人口が少ない状態が顕著であり、ピラミッド状の形ではなく、壺状になっている。これは全国的な傾向ではあるが、少子高齢化が深刻化している。



内子町の人口の推移（国勢調査より）



内子町の人口推移の要因
(総務省「住民基本台帳に基づく、人口動態及び世帯数に関する調査」より)



人口ピラミッド (2015 年国勢調査より)

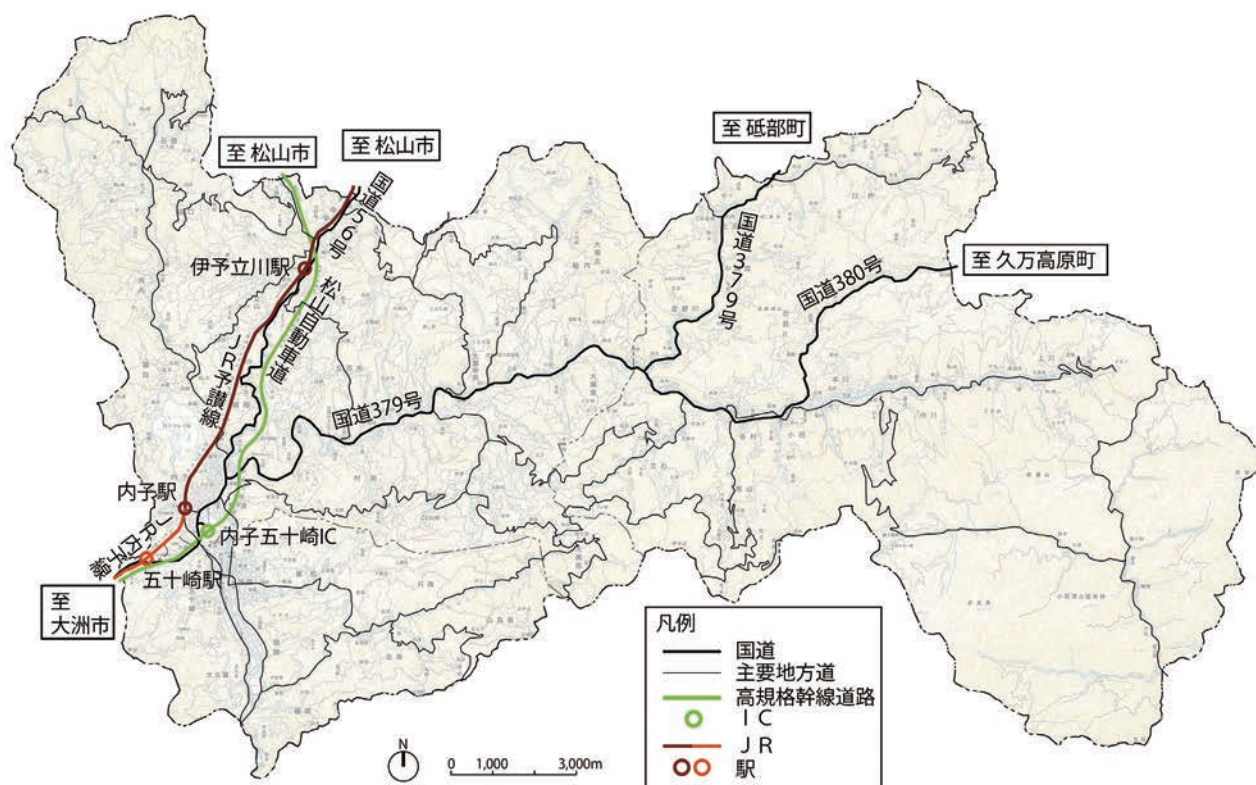
(4) 交通機関

内子町の道路交通網は、幹線道路として伊予市、松山市方面と大洲市、宇和島市方面を結ぶ国道56号が、町の中心部である内子地区と五十崎地区を二分するよう南北に走っている。また、小田川の本流・支流に沿って走る国道379号、380号が内子町のほぼ東西方向に走り、それぞれ小田地区と町の中心部である内子地区、五十崎地区を結んでいる。また、都市間道路として松山自動車道が国道56号と並行して整備されている。一方で内子町の都市計画道路の整備率は約25%となっている（平成25年2月末現在）。内子町内では国道56号の交通量がやや多く、約1.3万台／日（平成22年センサス）あるが、混雑度は0.98（同）となっており、混雑は見られない。通勤・通学流動（平成22年

国勢調査）をみると、大洲市とのつながりが強く見られ、通勤経路として国道56号が利用されているものと想定される。

鉄軌道としてはほぼ国道56号と同様のルートを鉄道路線が走っており、町内においてはJR松山駅方面からJR内子駅までがJR予讃線、そこからJR新谷駅までの5.3kmがJR内子線となる。このJR予讃線の特急を利用することで、JR松山駅から内子駅まで25分で到着することができる。

また、バス路線は主に町営バスや伊予鉄バスによって運営されている。主要となるバス路線は国道56号沿いに整備されているもので、大洲市方面と松山市方面とを結んでいる。



道路網現況図

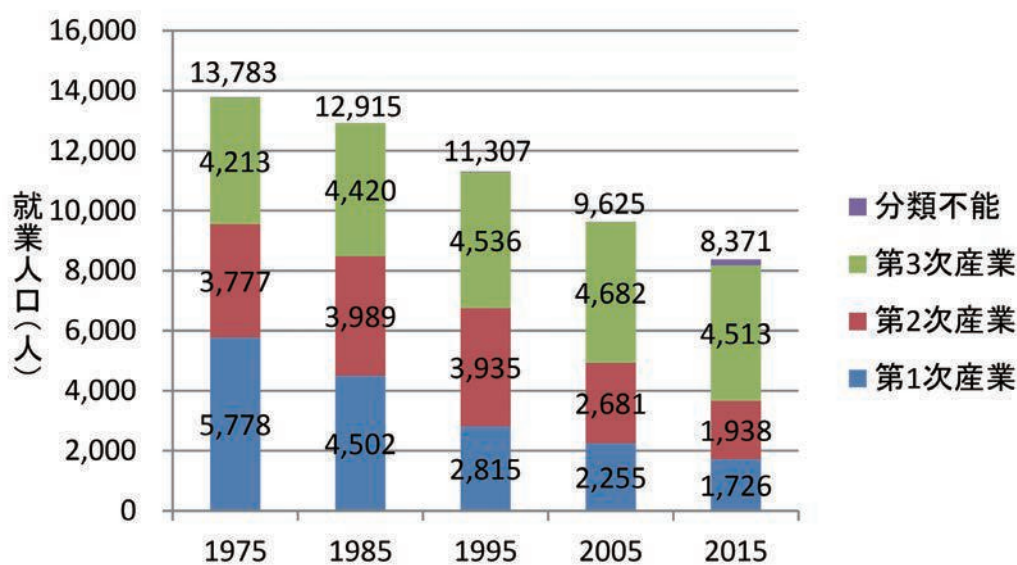
(5) 産業

内子町においては、総人口、生産年齢人口が減少している中において、第一次産業、第二次産業において減少が著しい。一方、サービス業などの第三次産業は横ばい傾向である。

就業構成比でいえば、農業・林業の占める割合が高く、製造業、卸売業・小売業なども多い。愛媛県と比較しても農業・林業の割合が多くなっている。基幹産業である農業では、栗や

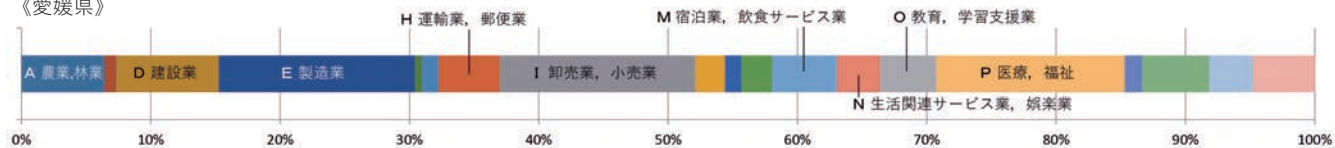
柿、梨、ブドウなどの果樹栽培が盛んで、販売量・販売金額とも高い割合を占める。

農業就業人口は、減少しているが、65歳以上の割合が増加しており、高齢化が進んでいる。専業・兼業農家の内訳については、兼業農家の割合が減ってきており、約半数が専業農家となっている。

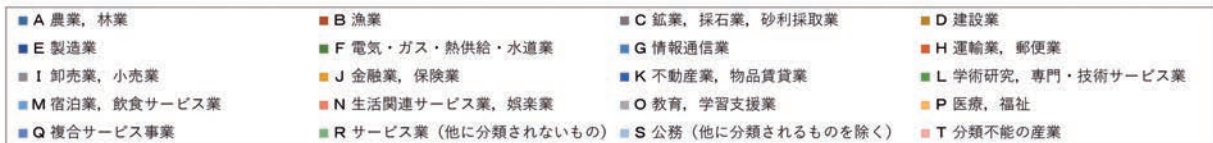
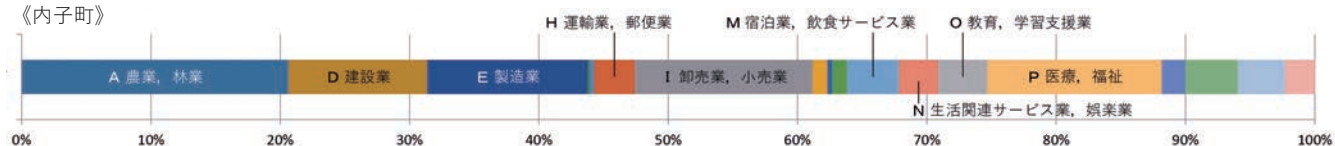


産業分類別就業者割合の推移（国勢調査より）

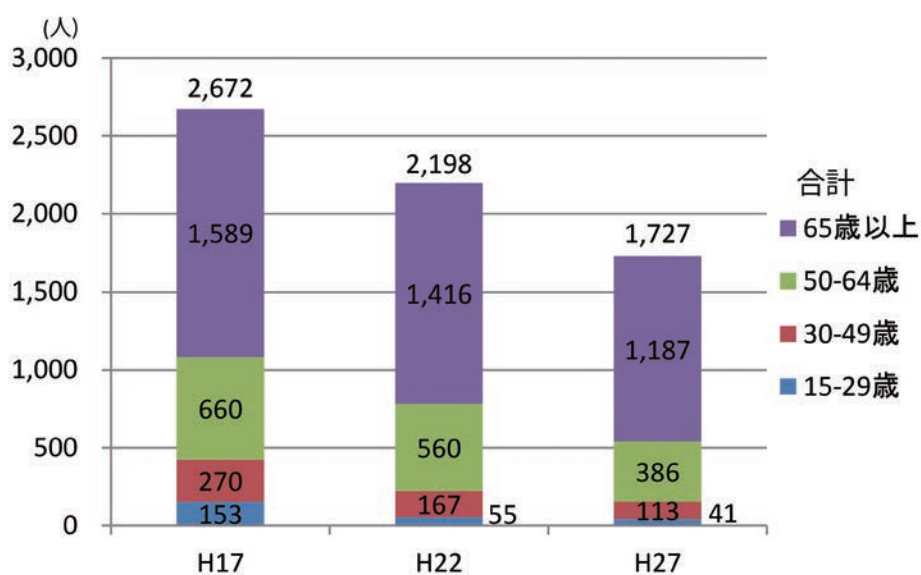
《愛媛県》



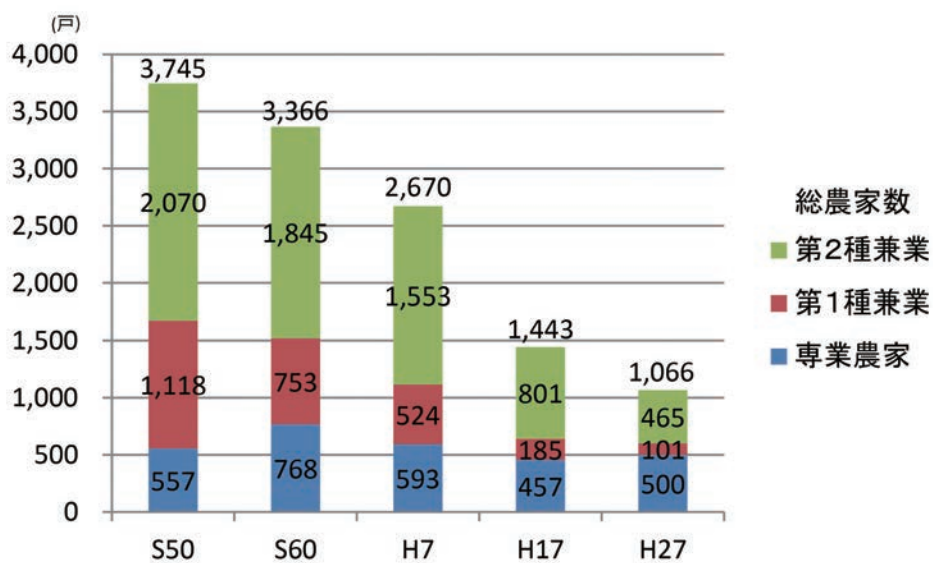
《内子町》



就業構成比の愛媛県と内子町（2015年）



内子町の農業就業人口の推移



内子町の専業・兼業農家数の推移



旬の農産物を楽しむ観光農園でのブドウ狩り



内子町の歴史的な空間を味わえる古民家の宿



増えている外国人観光客

(6) 観光

観光客を集客できる文化財資源は、内子地区中心部にある「八日市護国の町並み」（四国初の重伝建地区に選定）、同地区にある「木蠟資料館上芳我邸」（重要文化財、内子及び周辺地域の製蠟用具 1,444 点は重要有形民俗文化財）、「本芳我家住宅」（重要文化財）、大正時代に建てられた木造の芝居小屋「^{うちこぎ}内子座」（重要文化財）などがある。中心部から離れた里山資源として、石畳地区の農村景観と「石畳の宿」、五十崎地区の「^{いずみだに}泉谷の棚田」（日本の棚田百選（農林水産省）に認定）、自然景観資源として小田地区の「小田深山」などがある。

また、第一次産業活性化を目的とした農産物直売所の「道の駅内子フレッシュパークからり」、観光農園、農家民泊、農村で休暇を楽しむグリーンツーリズムなども推進している。

1980 年代から続く地域資源（地域アイデンティティ）の洗い出し作業やそれに伴う地区住民の意識啓発、受け入れ体制の整備などソフト、ハード両面のブラッシュアップにより、観光客数は年間 100 万人を超えるまでになった。

さらに、近年では観光振興を民間で担おうと地元商店街の青年らが NPO 法人を結成し、二次交通（駅等から目的地までの交通手段）対策の実証事業「レトロバス運行事業」を 10 年間実施。現在は歴史的な建造物を宿として活用する古民家ステイ事業などに取り組んでいる。

観光客数は、平成 23 年 (2011) の東日本大震災で落ち込んだものの同 28 年 (2016) は、愛媛県による観光イベント開催などにより過去最高の 129 万人を記録した。

外国人観光客に対しては、近年、国も政策として訪日外国人旅行者の受入環境整備を推進している。本町においても表示物の多言語化や海外向けプロモーション等を実施しており、平成 21 年 (2009) 頃の年間入り込み外国人観光客数が約 1,000 人であったのが、同 29 年 (2017) に

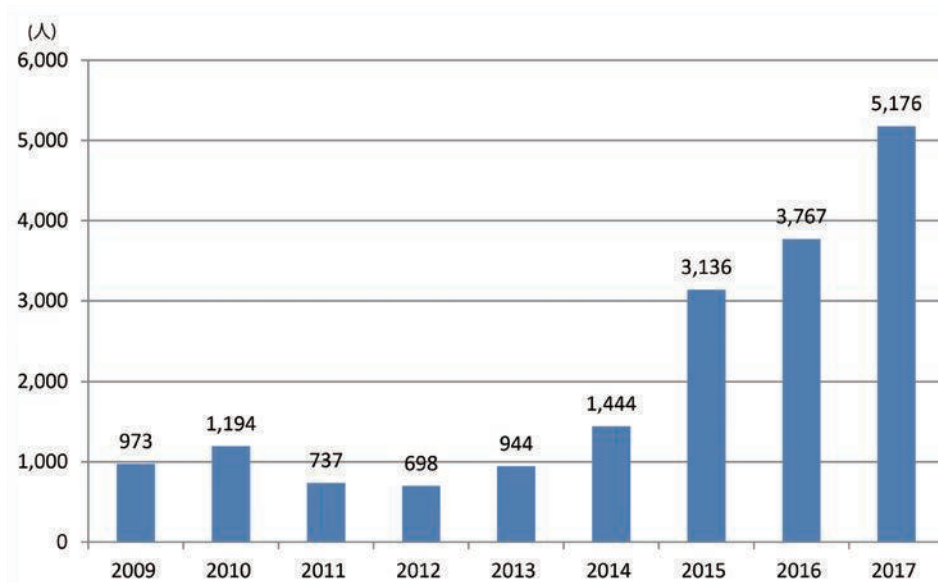
は5,000人を超えるまでになった。

全体の入り込み観光客数の内訳としては、散策と買い物などの日帰り観光客が圧倒的多数であり、宿泊者数は2%に満たないほどである。ただ、宿泊者が少ないにも関わらず観光消費額は緩やかではあるが伸びており、観光の産業化

を後押ししている。そのような中、観光振興策としては、内子に住む人々との交流型、町並みや村並み、山並みなど、地域資源やその拠点を周遊して滞在する滞在型、小規模の店舗や宿泊施設を活用する個人観光型の振興を目指している。



近年の入込み観光客数



外国人観光客

- 序
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8



3. 歴史的環境

(1) 原始・古代

①旧石器時代

愛媛県内に人が住み始めたのは、旧石器の研究から約2万年前といわれる。肱川流域(支流小田川流域も含まれる。)でも旧石器遺跡が発見され、ほぼ同時期に河岸段丘上で人々が生活を営んでいたことが明らかになった。

内子地区では平成の合併に先立つ平成6年(1994)、教育委員会によって詳細分布調査が実施され、翌7年(1995)には四国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査が行われた結果、石浦東・西遺跡、上和田遺跡、七反山遺跡、水戸森遺跡など多くの遺跡の存在が確認された。

肱川流域における石器の材質は赤色珪質岩やチャートが主体となっている。特に大洲市と境を接する神南山は赤色珪質岩の露頭が多く見られ、付近の黒内坊遺跡などが原産地遺跡(※採掘から石器製作までを行う遺跡のこ

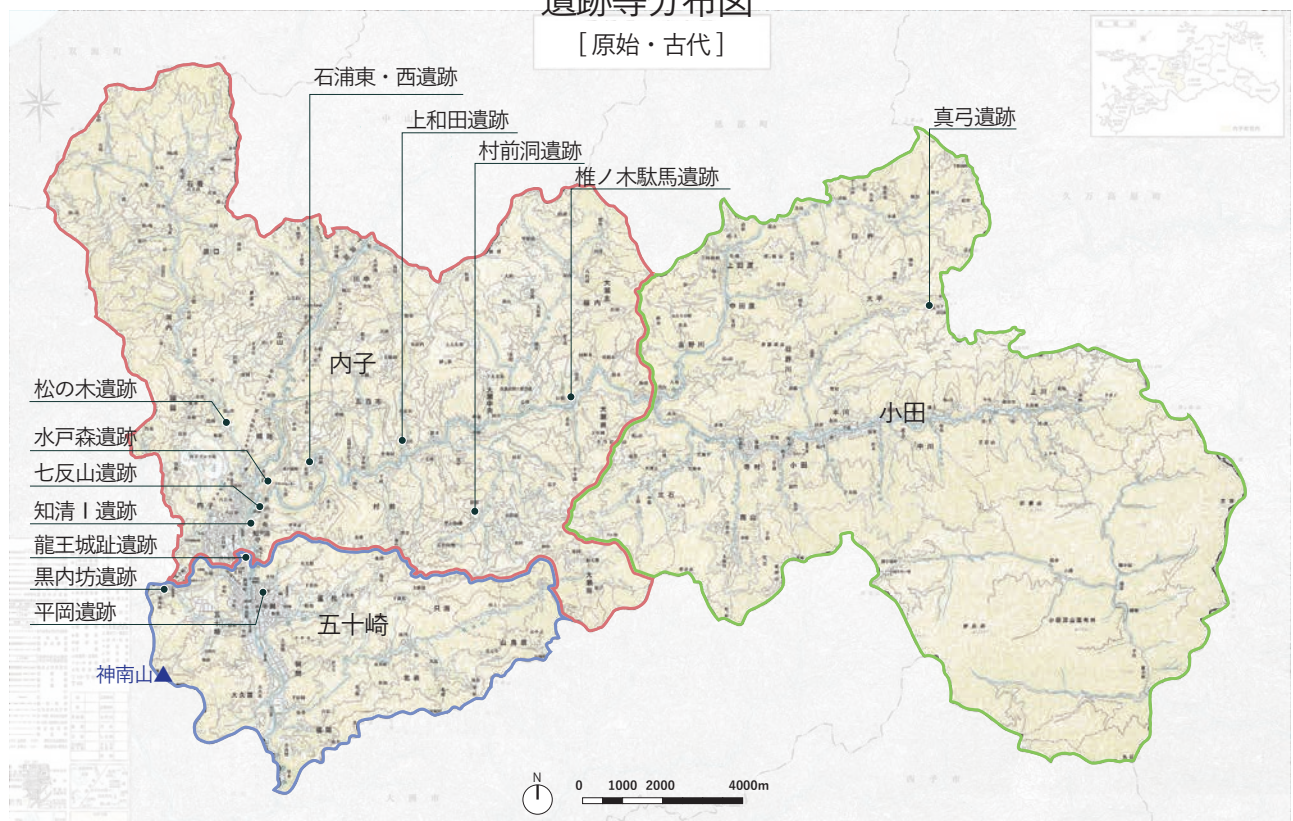
と。)や石器加工遺跡と推定されている。サヌカイト・黒曜石などが主流を占める愛媛県の中で、肱川流域は独自の文化圏を形成していたようであり、この傾向は縄文・弥生時代まで継続されている。

②縄文時代

1万数千年前から始まる縄文時代になると、肱川流域では中津川洞窟遺跡・穴神洞窟遺跡(西予市)、田合遺跡・如法寺遺跡(大洲市)など、多くの遺跡が確認されるようになる。内子町では石器に混じって縄文土器片や川石による石組遺構(※数個の川石を人為的に組み合わせた遺構)が確認された石浦東遺跡、祭器と推定される石器が出土した石浦西遺跡をはじめ、村前洞遺跡、松の木遺跡、椎ノ木駄馬遺跡、真弓遺跡などが知られている。また、過去の調査による90カ所以上の遺物散布地の多くが縄文遺跡と考えられてお

遺跡等分布図

[原始・古代]



り、内子町は縄文遺跡の数が突出しているのが特色であるという。

③弥生時代

縄文時代に続き、一説では紀元前3世紀～紀元3世紀にかけての弥生時代になると、肱川流域の宇和盆地で多くの遺跡が確認され、大洲盆地でも同じ傾向が見られるようになる。内子町においては、縄文時代に比べると遺跡の数は極端に少なくなり、五十崎の龍王城跡遺跡・平岡遺跡、知清Ⅰ遺跡が確認される程度である。遺跡未発見の可能性はあるが、90カ所以上の遺物散布地から発見された弥生時代の遺物がほとんどなく、続く古墳時代の遺跡も少ないことから、弥生遺跡は多くないと考えられる。

④古墳時代

紀元3世紀から6世紀の古墳時代には各地に古墳が造営された。肱川流域では宇和盆地が圧倒的に多く、笠置峠古墳や小森古墳の前方後円墳、鉄製甲冑片が出土した岩木赤坂古墳、横穴式石室を有する檜木駄馬古墳など60基以上の古墳が確認されており、弥生時代から古墳時代にかけて宇和地域が強い勢力に発展していったことを示している。

大洲盆地ではわずかに4基確認されているのみで、内子地区では古墳・遺跡ともに未発見である。遺物では唯一五十崎地区で須恵器が1点発見されているのみである。

⑤古代（飛鳥～平安時代）

645年の大化の改新以降に伊予国も国郡制が整備された。藤原京出土木簡に「宇和評」の記述があり、郡の設置以前に評という行政組織が置かれていたことがわかる。律令制下の伊予国は、今治を国府として宇摩、新居、

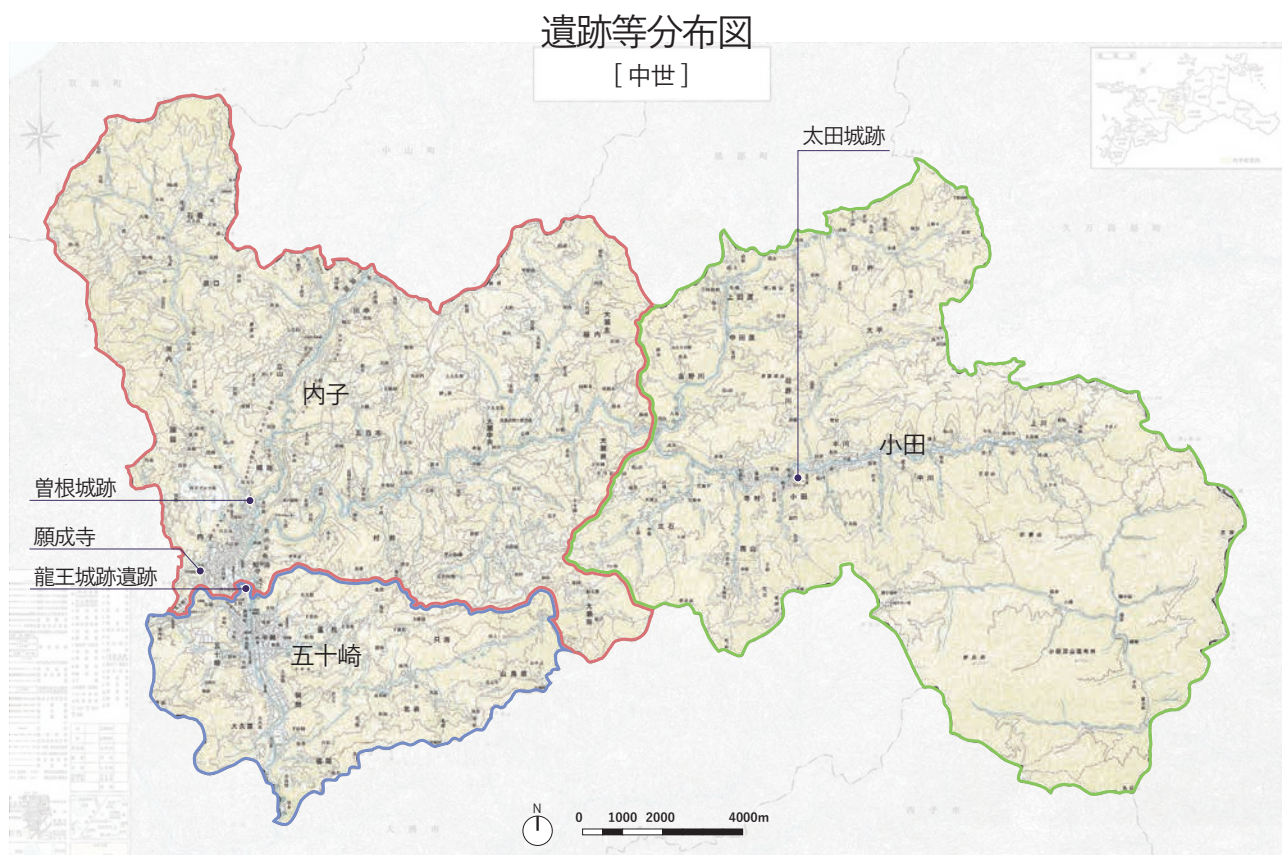
周敷、桑村、越智、野間、風早、和気、温泉、久米、浮穴、伊予、宇和の13郡が置かれ、大洲・内子は宇和郡に、小田は浮穴郡に属していたと推定される。貞観8年(866)には人口増加により、宇和郡が宇和・北(喜多)に分割されたので伊予国は14郡になり、内子・五十崎は喜多郡に属したと考えられる。郡の下には郷が置かれ、喜多郡には矢野、久米、新屋の3郷があった。内子・五十崎は位置的に新屋郷であったと推定される。浮穴郡には井門、拝志、荏原、出部の4郷があり、小田は位置的に荏原郷か出部郷であったといわれる。

古代の出来事としては、『扶桑略記』に承平5年(934)、海賊が喜多郡の不動穀(非常備蓄穀)を略奪したと記されている。

(2) 中世

内子地域を含めた中世の喜多郡では、平氏方の武将田内氏が元暦2年(1185)、伊予の豪族河野氏を攻めた。河野氏は大洲に比志城を築き、防戦に福良氏を出撃させた。田内氏は福良氏を滅ぼし、余勢を駆って比志城を攻撃したが撃退された(比志城の戦)。頼朝と義経の不和に際し、喜多郡は梶原景時に与えられたが、のちに宇都宮氏の所領になった。元徳2年(1330)宇都宮豊房は執権北条高時から伊予国守護に任命され、下野国(栃木県)から根来城(位置不明)に入城した。南北朝期の元弘3年(1333)、根来城の宇都宮氏は南朝方の忽那氏の攻撃を受けたが撃退した(根来城の戦)。

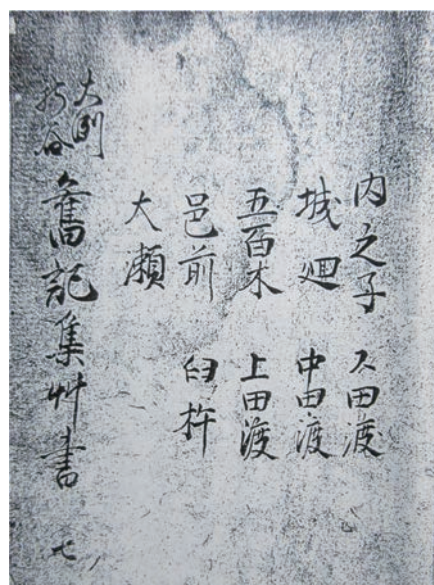
内子の地名は暦応3年(1340)の「清谷寺旦那議状」にある「内之子忠太夫」に因むといわれている。内子の廿日市には一遍上人を開山とする願成寺があり、南予における時宗の大刹であったが、戦国期の兵火や火災で小規模になったという。



戦国時代の内子地域の主な在地勢力には、曾根城（内子）の曾根氏、龍王城（五十崎）の伊賀崎氏、太田城（小田）の大野氏などがある。太田城は上^{おおよけじょう}浮穴郡久万の大除城の大野氏との結びつきが強かったといわれている。歴史的状況の解明は、資料の制約から進んでいない。いずれも豊臣秀吉の伊予平定時に降伏開城した。

曾根城遺構は畑地や山林として現存するが、龍王城、太田城の遺構は開発によって消滅している。

『大洲旧記』（正式には『大洲新谷旧記集草書』富永彦三郎、寛政12年(1800)）によれば、五十崎で14世紀中頃に始まった廿日市が栄えたとあり、現在の内子・廿日市地区近辺が五十崎領であった可能性を示唆している。戦国時代末期の内子では六日市・七日市という市が始まり、盛衰しながら江戸期も続いた。



『大洲旧記』

(3) 近世

①大洲藩の成立

天正 13 年 (1585)、小早川隆景が豊臣秀吉から伊予 35 万石を与えられた。その後、大洲は天正 15 年 (1587) から戸田勝隆、文禄 4 年 (1595) から藤堂高虎の支配を経て、慶長 14 年 (1609)、脇坂安治が 5 万 3 千石を与えられて大洲城に入り、大洲藩が成立した。脇坂氏は、庄屋を核とした藩による支配体制の基礎を固めた。

元和 3 年 (1617)、脇坂氏の転封に伴って^{ほう}伯耆国米子から加藤貞泰が 6 万石で入部し、明治 2 年 (1869) の版籍奉還まで約 250 年間加藤氏の支配が続いた。加藤家 2 代目泰興の時代、大洲領と松山領の領地の一部を交換する替地の願いが認められた。それにより伊予郡、喜多郡、浮穴郡の一部に加えて、風早郡忽那島、摂津領 (武庫郡) が大洲藩領となった。現在の内子・五十崎地区は喜多郡、小田地区は浮穴郡に属したため現在の内子町全域が大洲藩領であった。

一方で、元和 9 年 (1623) 加藤貞泰が急死し、嫡子である泰興が大洲藩を継いだが、幕府より弟である直泰に知行の一部を親族に分与する分知の内諾がなされたことにより、大洲藩の一万石の支藩として新谷藩が成立した。ただし、大洲藩主泰興はこれを認めようとしなかったため、長期的内紛に発展し、領地の表高を減らすことなく分家を興す内分分知の形がとられ、寛永 16 年 (1639) に決着した。この新谷藩の成立により、浮穴郡 8 カ村 (現小田地区の^{かみかわむら}上川村、^{まちむら}町村、^{たていしむら}立石村を含む)、伊予郡 3 カ村、喜多郡 3 カ村 (現五十崎地区の^{ただのうみむら}重松村、只海村を含む) が新谷藩領となった。

②在郷町

近世を通じて、内之子 (大洲藩)・五十崎の古田 (大洲藩)・小田の町村 (新谷藩) が、

農村における商工業集落である在郷町 (在町) として存在した。特に内之子には六日市・七日市 (のち八日市)・廿日市、五十崎には元禄時代に始まったといわれる牛馬市があり、江戸期を通じて各々の在郷町では日常的に生活用品や農具などの販売が行われていた。いずれも明治以降、商店街へと発展していった。

③近世の主な生産物

江戸期の当地域ではさまざまな産物が生産されたが、主なものには和紙と木蠟がある。

和紙は加藤家 2 代泰興が寛永前半、五十崎・古田地区の岡崎治郎左衛門に命じて漉かせたが、岡崎紙は大名専用的高级和紙となったため、越前出身の^{しゅうしょうぜんじょうもん}宗昌禅定門 (俗名善之進) が五十崎・平岡地区に伝えた和紙が一般に広まったという。良質の和紙は大洲半紙として好評を博したので、藩は享保 15 年 (1730) 紙座連中、延享 3 年 (1746) 紙方仲買連中を定めて統制に乗り出し、和紙は宝暦年間 (1751～63) に藩の専売制が敷かれて私的な取引が禁止された。宝暦 10 年 (1760)、藩は領内に紙役所 3 カ所・^{こうぞ}楮 (梶) 役所 2 カ所を設けたが、そのうち紙役所が内之子・小田、楮役所が五十崎に置かれている。また、宝暦 12 年 (1762) の資料によれば、藩内の半紙漉人 2,314 人中、内子・五十崎・小田が 1,718 人と約 3 分の 2 を占めるなど、当地域は和紙の一大生産地であり、藩の財政に大きく貢献したといわれている。

明治期に最盛期を迎える木蠟生産は、元文 3 年 (1738) 五十崎の綿屋善六によって始められ、原料の^{はぜ}櫨の木も九州から移入されたといわれている。内之子では同じ頃芳我源六が木蠟生産を開始して大坂に移出するなど、江戸中期には商品として取引が行われていた。木蠟生産は和紙同様大洲藩の主要産業になっていったが、農家の副業で生産可能な和紙と

違って設備や資本を要する木蠟は、藩による専売は行われなかった。しかし、原料と製品の統制は行われていたようである。天保以降から江戸末期にかけて、芳我弥三右衛門は製蠟工程の改良を行い、明治期の発展につながっていく。

酒造関係は、近世の内子地域におけるまとまった資料は発見されていないが、五十崎の千代の亀酒造の前身亀岡酒造は享保元年(1716)創業といわれている。

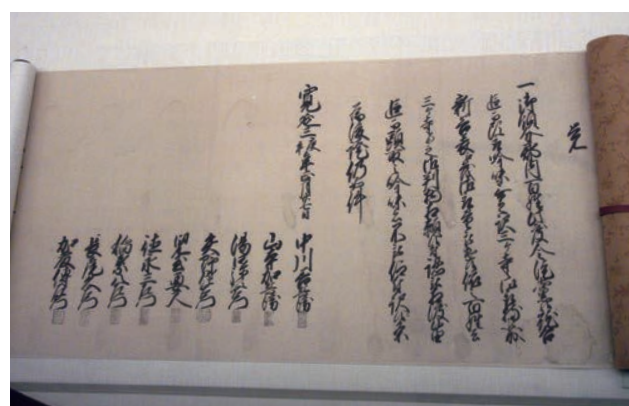
小田深山に広がる原生林は大洲藩山奉行の管轄下にあったが、当時は林業にまでは発展せず、わずかに木地師が山中を移動しながら、樹木を削って食器などを作っていたという。

④百姓一揆

江戸中期には藩財政が窮乏し、儉約令の発令などで支出を抑制する一方、増収策として年貢増徴、専売制の強化などを行った。こうした状況下、寛延3年(1750)内之子騒動が

発生した。小田で決起した百姓約1,500人は小田川を下り、中山・大瀬・五百木・五十崎の村々に参加を呼びかけ、約18,000人が内之子川原に集結した。新谷藩の斡旋によって29カ条の要求(紙の価格の引き上げや量り方の改善など)のほとんどが認められ、大洲藩は法華寺(大洲)・高昌寺(内子)・願成寺(内子)住職に首謀者の捜索を行わない旨の「覚」を発行して決着した。

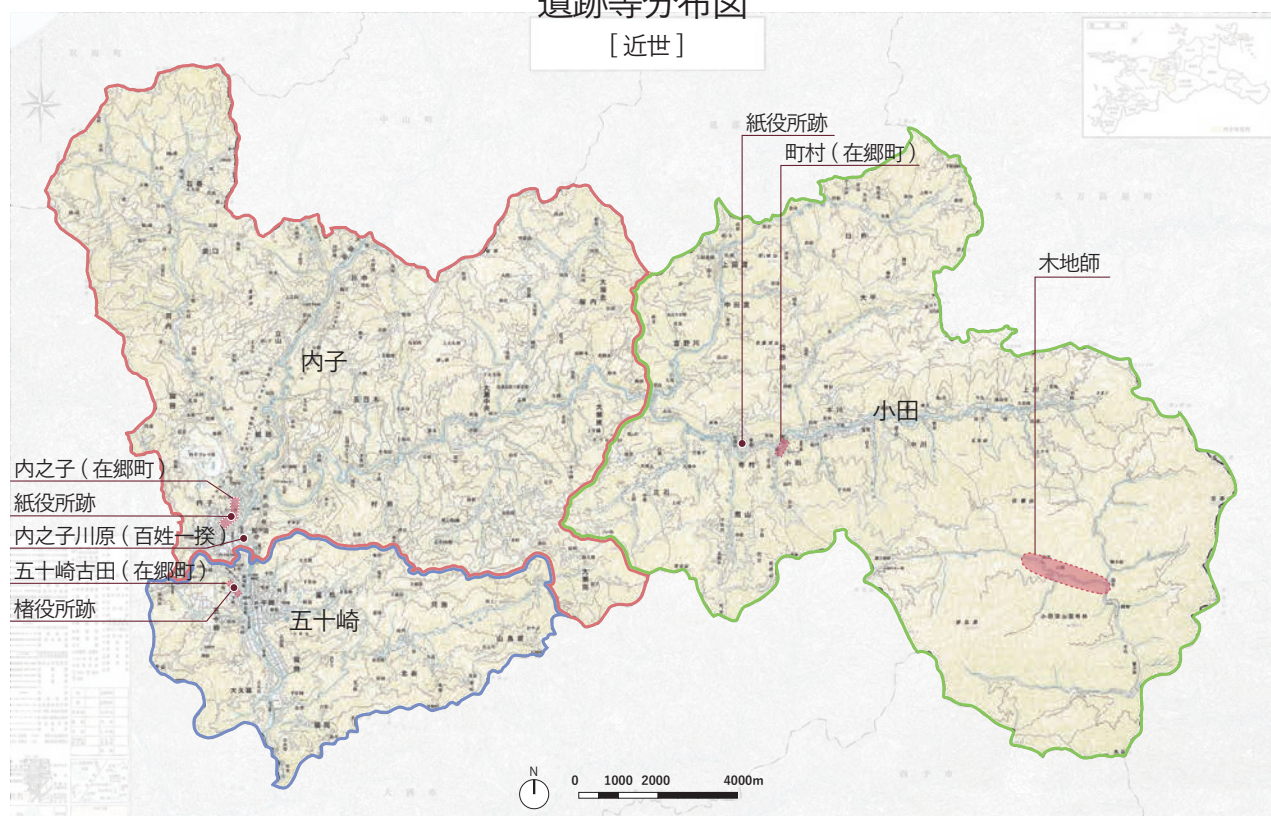
そのほか、松山藩領久万地域の百姓約2,800人が年貢減免を求めて内之子村まで越境し



大洲藩が三カ寺に宛てた「覚」

遺跡等分布図

[近世]



た寛保元年(1741)の久万山騒動、大瀬村の百姓約130人が松山藩領に越境した天明8年(1788)の大瀬騒動、五百木村横峰の百姓約100人が庄屋宅に押し寄せたが、高昌寺住職の説得で解散した文化7年(1810)の横峰騒動などがある。幕末には慶応2年(1866)、大瀬村の百姓福二郎を首謀者として、内之子村の庄屋や商家を打壊した奥福騒動が発生した。

なお、内之子騒動においては一揆勢が五十崎の庄屋新六宅を襲撃した際、酒桶を破壊して300石の酒を流しており(『伊予農民騒動史話』)、幕末の奥福騒動では、一揆勢が大瀬村成屋の酒屋を打ち壊し、さらに五百木・城廻村庄屋高橋氏の経営する五百木屋で六尺桶を破壊して酒を流していることから(『塩屋記録』;『新編内子町誌』所収)、庄屋が造り酒屋も経営して富裕化し、一揆の襲撃目標になっていたことが分かる。さらに大瀬の例から、庄屋でなくとも酒屋は富裕層とみなされて襲撃対象になっていたことも分かる。

⑤藩政の終末

農村では天災や飢饉のほかに貨幣経済の浸透により、土地を手放す農民や破産する庄屋まで現れた。加藤家10代泰済による和紙専売強化などの藩政改革によって藩財政は一時的に好転したが、やがて再び悪化した。天保10年(1839)には五百木・城廻・大瀬・村前の各村で独自の村法を制定している。幕末の文久2年(1862)加藤家12代泰祉は天皇側に立つことを明らかにし、新谷藩も追随したが、開国に伴う物価高に加えて長浜台場設置、農兵隊の編制などで軍事費の負担を強いられた。戊辰戦争で大洲藩は武成隊が東北地方にまで出兵し、戦死者を出している。新撰隊は内之子から大村金作が参加した2回目の出兵で京都警備を行い、やがて明治維新を迎えた。

(4) 近代

①明治期の体制

明治2年(1869)の版籍奉還によって封建支配体制は終了したが、最後の藩主加藤泰秋は大洲藩知事として政治を担当した。同4年(1871)の廃藩置県によって大洲県が置かれると、社会の大きな変革に動揺した大洲・内子・小田方面の民衆によって大洲騒動が起こり、山本大参事が自刃するなどの混乱があった。小田でも関連した臼杵騒動が起こった。その後は大洲県から宇和島県、神山県を経て愛媛県に移行した。区制・大小区制に続く同11年(1878)当地域は喜多郡(内子・五十崎)と上浮穴郡(小田)に所属した。同21年(1888)の市制・町村制に伴う合併で、内子は内子町・五城村・村前村・大瀬村・満穂村・立川村の1町5カ村、五十崎は五十崎村・天神村・福村・御祓村の4カ村、小田は田渡村・参川村・小田町村・石山村の4カ村体制になった。その後小田町村・石山村の合併をはじめ小規模な分離・統合があり、昭和30年(1955)まで続いた。

②明治期の産業

明治5年(1872)までに旧藩時代の諸制限や専売制が廃止され、内子地域では江戸期以来の木蠟生産が発展を遂げた。やがて芳我家を中心とする製蠟業者は、櫨の実を搾って取る生蠟を天日に晒す白蠟生産に着目し、生蠟は他から仕入れ、晒す作業に集約した経営を行った。平成4年(1992)『内子町産業経済誌』及び平成7年(1995)『新編内子町誌』によると良質の白蠟は国内外で好評を博し、明治20年代後半に内子の白蠟は愛媛県の約半分、全国の約3割を占める一大生産地になって輸出量は全国の約13%を占めた。五十崎にも晒し蠟業者が存在したが、小田を含めて生蠟生産や原料の櫨実採集が広く行われた。

資金の需要が高まると明治29年(1896)には内子銀行が設立され、大洲銀行・新谷銀行・長浜銀行とともに南予地域の中小銀行の一角を形成した。

藩政時代の和紙の専売は廃止されたものの旧藩時代の資金や販路も失い、安価な西洋紙の普及で和紙生産はしだいに衰退していった。明治期には三桎^{みつまた}を原料とする良質の改良半紙の研究が行われ、内子に工場が建設された。五十崎でも明治29年(1896)に改良半紙が作られるなど和紙生産は一時的に盛り返したが、これも日清戦争頃に衰退した。同41年(1908)大洲で改良半紙の組合が設立されたが、生産の中心は五十崎に移り、やがて細々と生産される程度になった。

江戸期にあまり振るわなかった蚕糸業^{さんし}は明治期に大洲で発展し始め、主に内子・五十崎で盛んになった。内子では明治中期から家内制手工業で生産されはじめ、明治末年に製糸工場が設立された。五十崎では明治20年前後に養蚕^{ようさん}が始められ、養蚕伝習所も設立された。五十崎では製糸よりも養蚕技術の向上を主としていた。

製糸業は明治末期～大正初期にかけて発展し、輸出も行われていたが、第一次世界大戦後の恐慌で衰退した。

「六日市吉屋記録」(『新編内子町誌』所収)によれば、天保9年(1838)の六日市の酒屋数は4軒となっているが、内子地域全体では造り酒屋は比較的多く存在していたと考えられる。明治期になると、江戸期の家業を引き継いだ業者のほかに、新たに創業する業者も現れた。小田には明治前期創業で、明治20年(1887)建築の店舗兼住宅が登録有形文化財にもなっている都築酒店がある。

明治29年(1896)喜多酒造組合が結成され、副組合長に内子の高岡善三郎、評議員に同じく芳我数衛が就任した。同42年(1909)当時

の内子町の町家を記録した『旧内子町家名鑑』には、酒造家として菊坂・下芳我・菊地・高岡・伊達・山根の名前が見える。

③大正～昭和前期

大正期に入ると、明治末期以来の電灯が徐々に普及し、電話の業務も始まった。愛媛鉄道の内子線が開通し、交通・通信手段が整備されていった。大正5年(1916)には内子座(平成27年(2015)重要文化財指定)が落成し、その後日露戦争勝利と大正天皇即位を記念した「紀念学堂^{きねんがくどう}」や、旭館^{あさひかん}という活動写真館が建設されるなど、文化的な営みも行われはじめた。

第一次世界大戦中は大戦景気に沸いたが、やがて戦後恐慌・金融恐慌・世界恐慌と相次ぐ不況の影響を全国的に受けた。明治20年代に発見された大瀬熊ノ滝鉦山は、同40年代に会社組織で採掘が行われたあと、大正2年(1913)に久原鉦業^{くわんちゆう}が買収して郡中港まで索道を建設し、大々的に採掘と運搬が行われた。しかし戦後恐慌の影響で同9年(1920)に閉山した。

内子では製蠟業が、安価なパラフィン蠟や電灯の普及という経済的条件や地理的条件などの影響を受け、大正10年(1921)頃までに全て廃業した。

不況の中で大正8年(1919)に生糸価格が下がりはじめ、昭和7年(1932)には暴落した。生糸価格の変動で同17年(1942)年から内子合同製糸工場が生産を続けたものの、同22年(1947)に操業を中止した。

大正3年(1914)刊行の『喜多郡の華』には、内子に9軒、五十崎に6軒の酒造業者が収録されている。「海南新聞」によれば、大正9年(1920)、内子の4軒、五十崎の2軒、立川の1軒、大洲柳沢の1軒の計8軒の酒造家が喜多酒造株式会社を設立した。

昭和4年(1929)刊の『四国醸造業会史』によれば、酒造家として喜多酒造のほかにも増えており、酒醤油販売業者の部では、酒造家と酒販売店が内子5軒、五十崎8軒となっており、五十崎の増加が著しい。昭和16年(1941)喜多酒造株式会社は買収され、酒六酒造株式会社を設立して現在に至っている。

内子銀行は昭和7年(1932)に休業に追い込まれ、翌年再開したが同12年(1937)予州銀行に吸収合併された。

五十崎では昭和9年(1934)、昭和鉱業株式会社が^{おおぐき}大久喜鉱山の採掘権を譲り受け、戦中・戦後にかけて採掘を行った。

小田では明治期にも木の伐り出しは行われていたが、本格的に行われたのは大正12年(1923)に森林鉄道が開通してからである。昭和に入ると木材の需要が高まり林業は発展した。太平洋戦争末期には軍事目的で大量に伐採されたため山は荒れたという。

④太平洋戦争

日本が戦争への道を歩む中、内子地域でも家庭防空組合・警防団・大政翼賛会支部が結成され、小学校も国民学校と改称されて皇国教育や思想統制が行われるようになった。物資不足から国民生活は窮乏。やがて食糧や生活用品も配給制になり、食糧増産のための開墾が行われた。昭和17年(1942)からは金属回収が実施され、内子・^{ちせい}知清地区の工場では松根油が製造された。

内子では八日市の天神社裏山に防空監視哨が設置され、日増しに上空を通過する米軍機が増えていったという。内子地域には空襲の被害はなかったが、知清橋付近と龍王城跡付近に爆弾が投下され、立川では空中戦が目撃されている。小田では撃墜されて脱出した米軍機の搭乗員捜索が大がかりに行われた。

一五年戦争(満州事変～終戦)における

内子地域の戦没者は1,121人(内子624人・五十崎250人・小田247人)にのぼった。

(5) 現代

①戦後の改革

終戦を迎え諸改革が行われた。膨大な債務処理のために財産税が課せられ、農地改革が実施されて自作農が飛躍的に増加した。労働組合育成によって昭和22年(1947)内子の大岡製作所で組合が結成されたのをはじめ、教職員組合など職場での労働組合結成が進んだ。教育改革では六三制が実施され、内子地域の各町村に新制中学校が誕生した。同23年(1948)には自治体警察制度が発足したが、のちに県警の管轄に一本化された。

②町村合併

昭和28年(1953)に町村合併法が施行され、新しく内子町・五十崎町・小田町が誕生した。さらに内子と五十崎の合併による内山市構想も模索されたが実現しなかった。内子町の前途は多難で、同31年(1956)には地方財政再建法の適用を申請する事態になった。小田町では同53年(1978)に財政再建団体に指定された。いずれも数年後には再建の目途が立っている。

③高度経済成長時代以降

昭和30年代半ば頃からの高度経済成長期には、当地域でも特に若者の人口流出が見られ、過疎化が進んだ。昭和45年(1970)には内子・五十崎では過疎法に基づく過疎地域振興計画が策定された。小田では、過疎化の歯止めは第一次産業の振興という方針のもとに、特に林業の振興が図られた。

内子町では昭和57年(1982)、八日市護国地区の町並みが「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、愛媛県からは文化の里「木

蠟と白壁の町並」に指定された。さらに町並みから村並み、山並みへと広がりを見せるなど、地域の特徴を最大限に生かす以後のまちづくりの方向を示すものとなった。平成2年(1990)には本芳我家・上芳我家・大村家が重要文化財に指定され、同27年(2015)には内子座も指定された。

④平成の合併

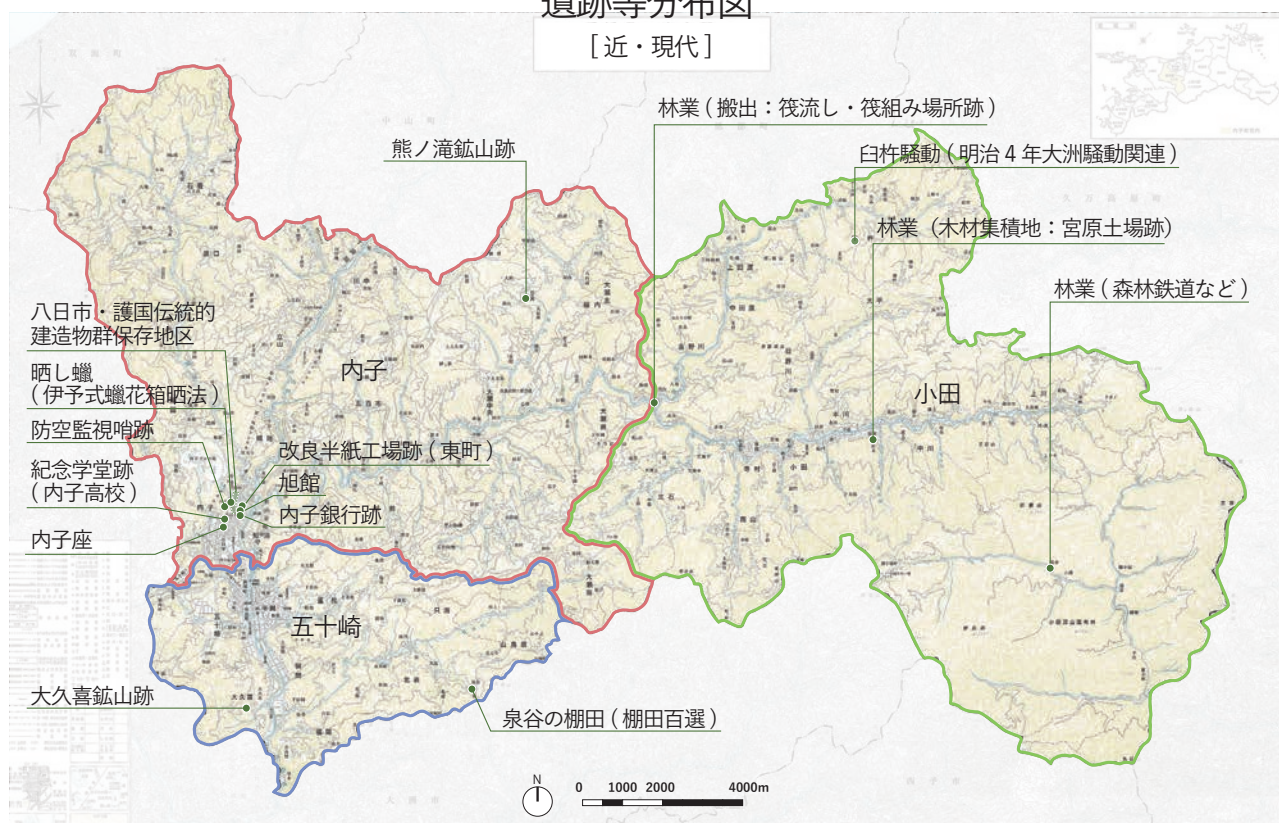
平成17年(2005)、内子町、五十崎町、小田町の3町が合併し、新しく内子町が誕生した。当初の人口は約2万人を数えたが、全国的な人口減少の影響で、同30年(2018)現

在は約1万6千人とおよそ3千人余り(約20%)減少し、高齢化も進行している。内子町では少子・高齢化の克服を最大の目標ととらえた「持続可能なまちづくり」をかかげて、多方面の取り組みを行っている。

現在空き家の増加が進行しており、地域に点在する歴史的・建築学的な名建築や、農村・山村・商業地区各々の特色を有する貴重な建物も、保存の手が及んでいないためにその多くが朽ち果てたり解体されたりしている。空き家内には歴史・民俗資料が未調査のまま残り、捨てられる例も多々発生している。

遺跡等分布図

[近・現代]



(6) 内子町ゆかりの人物



芳我 弥三右衛門
はが やざえもん

【享和元年(1801)
～明治5年(1872)】

享和元年(1801)、現在の内子八日市地区に生まれる。本芳我家初代。弘化から文久年間(1844～63)にかけて伊予式蠟花箱晒法^{いよしきろうばなはこさらしほう}を考案。商圈の拡大を図ったことにより内子の木蠟生産が本格化した。明治5年(1872)9月4日没。



安達 玄杏
あだち げんきょう

【天保9年(1838)
～明治24年(1891)】

天保9年(1838)、現在の五十崎重松地区に生まれる。明治12年(1879)、六日市地区に町内初の近代^{せいとくかん}的病院・精得館を開業。病院経営のかたわら、私費を投じて東京に「安達社」を設け、地方から遊学する青少年のための育英事業を創立した。これによって、年々遊学する者が続出し、数多くの人材を輩出することとなった。明治24年(1891)3月19日病没。

高岡 善三郎
たかおか ぜんざぶろう

【嘉永元年(1848)
～大正3年(1914)】

嘉永元年(1848)、現在の五十崎古田地区に生まれる。現在の八日市地区(坂町周辺)に居を構え、山産物を主とした商売を行い、商品を大阪方面に移出するなどして巨額の利益をあげた。後に三机^{みつくえ}(現伊方町^{いかた})から杜氏を雇い、酒造りを本格的に開始。業績を上げ、喜多郡屈指の造り酒屋となった。大正3年(1914)9月28日没。



芳我 弥衛美
はが やえみ

【嘉永3年(1850)
～大正2年(1913)】

嘉永3年(1850)、現在の内子八日市地区で製蠟業を営む上芳我家の長男として生まれる。上芳我家の2代目として製蠟業において生産の向上、品質の改良に努め財をなした。その規模は本家・本芳我家に次ぐ内子第2位の生産量を誇った。現在の上芳我家住宅は弥衛美の代に建てられた。大正2年(1913)8月26日死去。



芳我 弥三衛

はが やざえ

【嘉永 7 年 (1854)
～大正 4 年 (1915)】

嘉永 7 年 (1854)、現在の内子八日市地区で製蠟業を営む本芳我家に生まれる。家業の製蠟業に専念し、商標を「旭鶴^{あさひつる}」とし海外へも輸出した。最盛期の生産量は日本一と認められ、国内外の博覧会に出品し、数度の褒賞を受けた。明治 29 年 (1896) 同志を募り基本金 8 万円で内子銀行を創設、頭取に就任し経済発展に尽くした。大正 4 年 (1915) 11 月 28 日死去。



吉岡 平衛

よしおか へいえ

【安政 2 年 (1855)
～大正 13 年 (1924)】

安政 2 年 (1855)、現在の内子地区に生まれる。家業の大工を継いだ後、後に文房具店を始め、紙の原料である楮、三桎の集荷取引と合わせて半紙の販売を行う紙商となった。後に土佐の改良半紙に出会い、技術を習得。さらに高知の技術者を招いて研究を重ねるとともに明治 18 年 (1885) 内子地区東町に製紙工場を開設。翌 19 年には天神村（現在の五十崎平岡地区）の有力者とはかり、現地の 10 数名に技術指導を行うなど製紙の普及につとめた。工場の閉鎖後には販売を担当、販売ルートの拡大に尽力した。大正 13 年 (1924) 5 月 18 日没。



高橋 龍太郎

たかはし りゅうたろう

【明治 8 年 (1875)
～昭和 42 年 (1967)】

明治 8 年 (1875)、現在の内子地区東町に生まれる。同 31 年 (1898)、第三高等学校（現京都大学）卒業後、大阪麦酒会社に入社、ビール醸造の技術習得のためドイツに留学した。帰国後、吹田工場技師としてビール醸造に精力を傾け、同 39 年 (1906)、大日本麦酒会社の発足時には吹田工場長、大正 12 年 (1923) には常務取締役となり、新しい技術研究を指導した。昭和 12 年 (1937) には社長に就任。世界三大ビール会社の一つにまで発展させた。戦後同社は二分され、後にアサヒビールとサッポロビールとなる。

スポーツを愛好し、晩年には日本サッカー協会会長としてアマチュアスポーツの振興に力を入れ、また昭和 29 年 (1954) からプロ野球の球団「高橋ユニオンズ」のオーナーも務めた。



高畑 誠一
たかはた せいいち

【明治 20 年 (1887)
～昭和 53 年 (1978)】

昭和 26 年 (1951) には吉田内閣の通産大臣として戦後日本経済の復興に尽くし、同 39 年 (1964) には勲二等旭日重光章を授与された。昭和 42 年 (1967) 12 月 22 日没。

明治 20 年 (1887)、現在の内子六日市地区に生まれる。同 42 年 (1909)、神戸高等商業学校（現神戸大学）を卒業し、神戸の総合商社鈴木商店に入社。28 歳の若さでロンドン支店長となった。後に第一次世界大戦中のヨーロッパにおいて、鈴木商店の黄金時代を築いた。大正 11 年 (1922) 日商創立初代社長となる。貿易振興の功により昭和 49 年 (1974) 5 月勲三等瑞宝章を授与され、翌年内子町名誉町民となる。昭和 53 年 (1978) 9 月 19 日没。



米田 吉盛
よねだ よしもり

【明治 31 年 (1898)
～昭和 62 年 (1987)】

明治 31 年 (1898)、現在の内子^{ろんでん}論田地区に生まれる。大正 15 年 (1926)、中央大学専門部法科卒業。昭和 2 年 (1927)、法律を教える私塾「武蔵園」を開設。その後、横浜専門学校を設立し、校長兼理事長に就任。同 23 年 (1948) には新制大学「神奈川大学」を創立。学長兼理事長を同 43 年 (1968) まで務める。同 44 年 (1969) 勲二等旭日重光章受章。同 54 年 (1979) 内子町名誉町民となる。昭和 62 年 (1987) 5 月 17 日没。



村上 節太郎
むらかみ せつたろう

【明治 42 年 (1909)
～平成 7 年 (1995)】

明治 42 年 (1909)、現在の五十崎天神地区に生まれる。昭和 10 年 (1935)、東京文理大学を卒業。同年今治高等女学校（現今治北高等学校）に勤務し、以後、同 50 年 (1975) 愛媛大学法文学部を退官するまで、教育者や地理学者の育成等に尽力した。地理学者として地域の研究調査に精力的に取り組み、同 56 年 (1981) には勲三等旭日中綬章を受ける。五十崎風博物館の開館にあたっては国内外の風の収集に貢献した。平成 6 年 (1994) 五十崎町名誉町民となる。平成 7 年 (1995) 10 月 24 日没。



上岡 美平（本名巳平）
うえおか みへい

【明治 43 年 (1910)
～昭和 12 年 (1937)】

明治 43 年 (1910)、現在の五十崎下町地区の呉服商に生まれる。旧制大洲中学校（現大洲高等学校）在学中に絵を始め、早稲田大学入学後の昭和 5 年 (1930) には春陽会研究所に通い、木村荘八らの指導を受けた。同 7 年 (1932) 研究所コンクールで「裸婦立像」が 1 位となる。卒業後は帰郷し、五十崎青年学校専任教員となった。地方画壇で制作を続け、題材は郷土の自然や身近な人々を形式にとらわれずに生き生きと描いた。昭和 12 年 (1937) 日支事変に召集され、9 月に中国上海近傍に上陸。27 日、28 歳の若さで羅店鎮沈家橋において戦死した。



丸井 千年
まるい ちとし

【明治 30 年 (1897)
～昭和 58 年 (1983)】

明治 30 年 (1897)、小田地区に生まれる。大正 12 年 (1923) 京都大学医学部を卒業し、郷里・小田地区で開業。仁術（※医療は「人命を救う博愛の道である」（広辞苑）ことを意味する格言より。）の信念に徹し、自己を顧みず、へき地医療の向上と住民の保健衛生に全力を尽くし、名医としてあがめられた。

昭和 40 年 (1965) にはへき地医療の将来を考え、済生会小田病院の誘致に尽力。病院の開設にあたっては、自己の医院を閉鎖し、小田町立中川診療所の医師として、その生涯を医療に専念した。同 41 年 (1966) 小田町名誉町民となる。昭和 58 年 (1983) 6 月 15 日没。



二宮 幸巳
にのみや こうみ

【明治 36 年 (1903)
～昭和 61 年 (1986)】

明治 36 年 (1903)、小田地区に生まれる。昭和 4 年 (1929)、小田町に木材製林業を開業。阪神方面に出荷するなど小田町材の名を広めるとともに林業を振興した。教育にも熱心であり、同 27 年 (1952) の小田中学校講堂建設の際にはその所要木材すべてとその他の資材を寄附するなど、多くの私財を投じた。また、同 36 年 (1961) には松山市に松山聖陵高等学校を創設し、戦後の混乱期の高校進学率の向上に努めた。同 48 年 (1973)、小田町名誉町民となる。昭和 61 年 (1986) 5 月 26 日没。

4. 文化財の分布状況

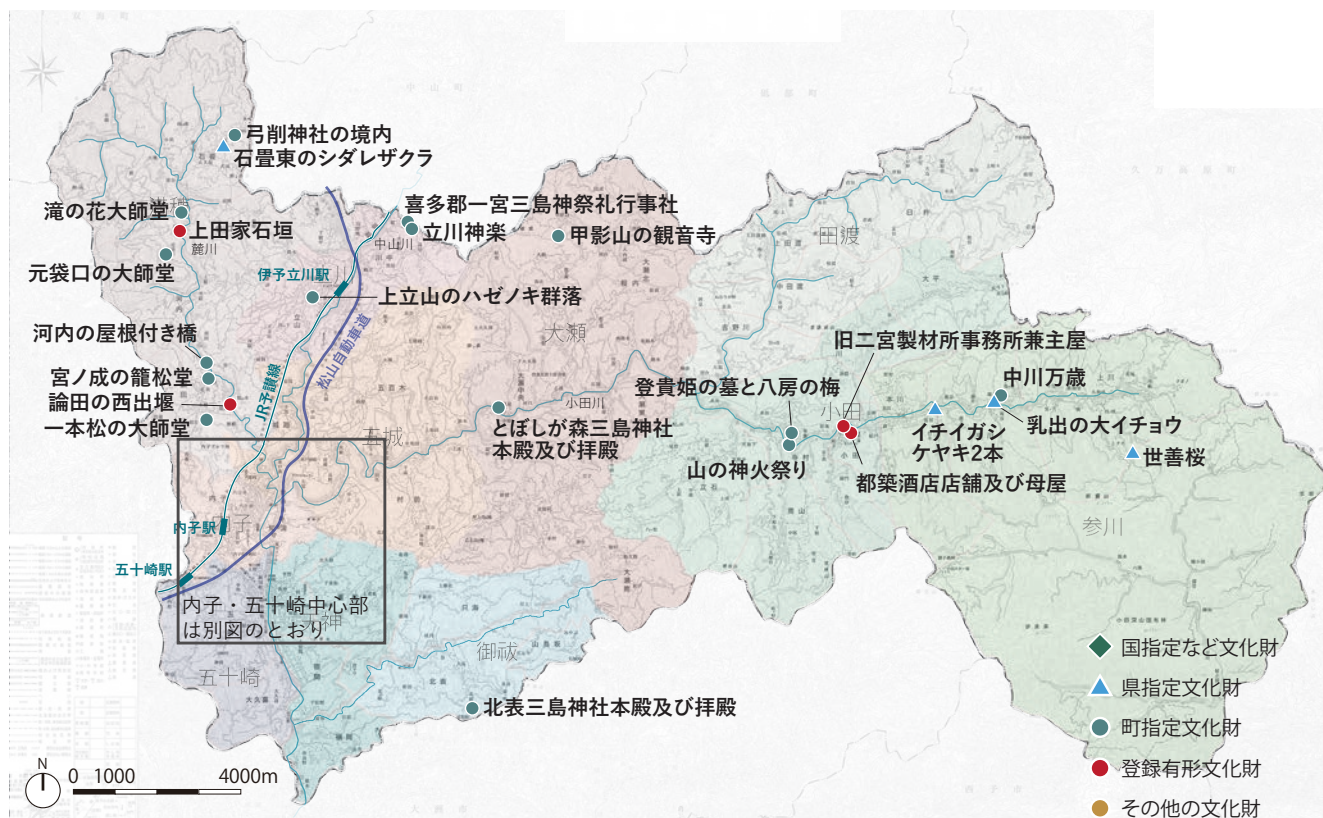
(1) 指定等文化財の分布状況

内子町には、令和4年(2022)3月24日現在で、合計119件の文化財がある。その内訳は、国指定文化財が5件、国選定地区が1件、国登録有形文化財が10件、県指定文化財が7件、町指定文化財が96件となっている。

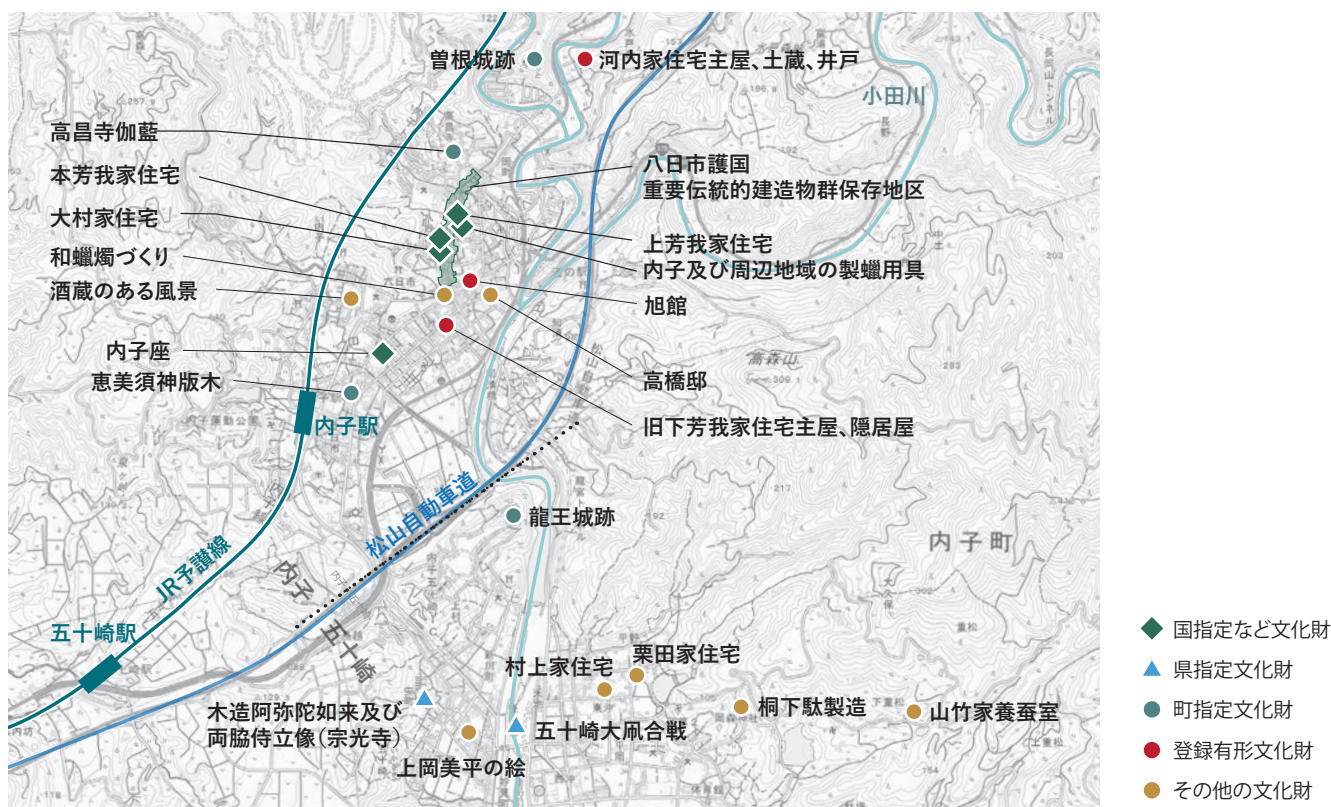
文化財の種別指定等の状況

	有形文化財								無形文化財	民俗文化財		記念物			計
	建造物	絵画	彫刻	工芸品	書跡	古文書	考古資料	歴史資料		有形の民俗文化財	無形の民俗文化財	遺跡	名勝地	動物・植物・地質鉱物	
国指定	4									1					5
国選定	1														1
県指定			1								1			5	7
町指定	3	3	9	2		2	1	9	1	12	6	8	1	39	96
国登録	10														10
計	18	3	10	2	0	2	1	9	1	13	7	8	1	44	119

文化財の分布状況図（広域）



文化財の分布状況図（内子・五十崎中心部）



このうち、主な有形文化財（建造物）等は次のとおりである。

★：第2章に記載あり

(2) 国指定等文化財

本町における国指定等文化財は6件であり、種別では有形文化財4件（建造物4件）、有形の民俗文化財1件、伝統的建造物群1件である。建造物については、「本芳我家住宅」、「上芳我家住宅」、「大村家住宅」、「内子座」がある。以下、（ ）内の分類は国指定名称で表記する。

① 国指定文化財

【本芳我家住宅】（重要文化財（建造物）、内子・八日市地区）★

製蠟業で栄えた芳我一族の本家の住宅。敷地は町並保存地区内にあり、広い面積を占める。敷地内には明治22年（1889）建築の主屋のほか、炊事場、産部屋、便所、湯殿、土蔵が立つ。平成2年（1990）に重要文化財に指定されており、指定にあたって「内子の木蠟生産が最も盛んであった時代を背景に建築されただけあって、建物の質が良く、華やかな意匠になり、内子の町並みの中でも際立った存在である。付属の建物や庭園など敷地全体にわたって往時の面影を伝えており、貴重である」と評されている。



本芳我家住宅

【上芳我家住宅】（重要文化財（建造物）、内子・八日市地区）★

本芳我家の筆頭分家の屋敷であり、本家に次いで町内2位の規模を誇る製蠟業者として栄えた。主屋は明治27年(1894)の上棟で、敷地内には炊事場、離れ座敷、産部屋など居住関係施設と釜場、出店倉、物置、土蔵など木蠟生産関係施設10棟が残る。平成2年(1990)、地場産業と豪商の住宅の関わりを示す点で重要な遺構であると評価され、重要文化財の指定を受けた。



上芳我家住宅

【大村家住宅】（重要文化財（建造物）、内子・八日市地区）★

町並保存地区の中心部に位置する。主屋は寛政年間(1789-1801)の建築で、町並保存地区内で最古級の町家である。敷地内には主屋、裏座敷、木小屋、藍蔵の4棟の建物が現存している。明治中頃には染物商、明治後期から大正初期までは生糸製造に関わった。



大村家住宅

江戸後期から明治期の町家の状況が分かる好個の資料として、平成2年(1990)に重要文化財に指定された。

【内子座】（重要文化財（建造物）、内子・六日市地区）★

大正5年(1916)に地域の名士らが発起人となって創建した劇場。設計は松山市の長曾雄熹で、明治20年(1887)に建設された同市の「新栄座」を参考にしたと伝わる。開場以降、歌舞伎や文楽、活動写真などさまざまな興行が行われてきた。途中、映画館や商工会の事務所などにも使われたが、昭和60年(1985)に復原工事を実施。現在も劇場として幅広く活用されている。芝居小屋が近代に入り正面性が重視されだした過渡期の劇場として評価されている。



内子座

【内子及び周辺地域の製蠟用具】（重要有形民俗文化財）

内子町が町内を中心に周辺地域一帯から収集した製蠟に関する資料1444点。原料となる櫨の実の収穫から製品になるまでの各工程に加えて、仕事着や儀礼用具など製蠟業に従事した人々の生活に関わる資料がまとまって指定されている。内子周辺地域だけでなく、西日本における櫨蠟生産を知る上で貴重な資料となっている。



内子及び周辺地域の製蠟用具

② 国選定文化財

【八日市護国伝統的建造物群保存地区】

（重要伝統的建造物群保存地区、内子・八日市護国地区）★

八日市護国地区は旧街道沿いに位置し、江戸後期から大正期にかけて建てられた町家や商家などが並ぶ。通りは約600m、面積は3.5haと小規模ながらも伝統的建造物が約8割を占める。交通の要衝として、また高昌寺の門前町として発達。明治期に木蠟生産が最盛期を迎え、その隆盛による屋敷や土蔵が残る。浅黄色の漆喰塗り籠めの重厚な土壁と通りと平行に軒が連なる平入が多いのが特徴。



八日市護国伝統的建造物群保存地区

(3) 愛媛県指定文化財

愛媛県指定文化財は7件であり、種別で有形文化財1件(彫刻1件)、無形の民俗文化財1件、記念物5件である。以下、()内の分類は県指定名称で表記する。

【木造阿弥陀如来及び両脇侍立像】(有形文化財(彫刻)、五十崎地区)

曹洞宗祖月山宗光寺に安置されており、ヒノキの寄木造で、鎌倉時代初期の製作であると推定されている。観音菩薩は前方に出した両手に蓮華を捧げ、勢至菩薩は合掌して立つ、いわゆる来迎型の阿弥陀三尊像である。その作風は見事で、ことに中尊は、張りのあるみずみずしい肉どりを示す面相に、納衣の衣文も巧みに整え、快慶風の特徴が顕著であると評されている。



木造阿弥陀如来及び両脇侍立像

【五十崎大風合戦】(無形民俗文化財)★

※イベント時は「いかざき大風合戦」と表記。

毎年5月5日に、小田川兩岸の豊秋河原^{とよあき}を舞台に開催されている五十崎地区最大の行事である。起源は鎌倉時代とされ、男子出生の初節句の祝いとして風を揚げていたのが、風のいたずらで糸がもつれ合ったことが合戦の始まりと伝わる。当日は小田川を挟んで五十崎側と天神側に分かれて風を揚げ、風糸についた「ガガリ」と呼ばれる刃物で相手の糸を切り合う。子どもの初節句を祝い、健やかな成長を願う催しとして今日まで受け継がれている。



五十崎大風合戦

【乳出の大イチョウ】(天然記念物、小田・中川地区)★

小田地区中川にある三島神社の境内にある。同社の縁起は和銅5(712)年に詔勅によって大三島から三神を勧請したことにはじまり、大イチョウはこの勧請と同年代に植えられたと伝わる古木である。幹周7m、樹高45mに及び、幹のあちこちから2mに及ぶ長い気根が垂れ下がっている。この皮を煎じて飲むと母乳の出がよくなるという言い伝えから「乳出の大イチョウ」と名付けられた。



乳出の大イチョウ

【石畳東のシダレザクラ】(天然記念物、内子・石畳地区)

内子石畳東地区の小高い丘の上にある。エドヒガンの変種で、樹齢250年以上とされている。幹周3.7m、樹高5.5m。管理は周辺住民で組織する「石畳東のシダレザクラ保存会」が行っている。木のたもとには日浦大師堂があり、当地区の新四国八十八カ所の11番、12番札所となっている。



石畳東のシダレザクラ

他、天然記念物には「イチイガシ」(小田・本川地区(広瀬神社))★、「ケヤキ」(2本、同)★、「世善桜」^{よぜん}(小田・上川地区)★がある。

(4) 内子町指定文化財

町指定の文化財は 96 件あり、種別では、有形文化財は建造物 3 件、美術工芸品 24 件（絵画 3 件、彫刻 9 件、工芸品 2 件、古文書 2 件、考古資料 1 件、歴史資料 9 件）、無形文化財 1 件、民俗文化財は有形の民俗文化財 12 件、無形の民俗文化財 6 件、記念物 48 件（遺跡 8 件、名勝地 1 件、植物 39 件）を数える。以下、名称及び（ ）内の分類（町指定名称）は、平成 27 年（2015）発行の『内子町誌うちこ時草紙Ⅰ文化編』に準じる。

【高昌寺伽藍】（有形文化財（建造物）、内子・護国地区）★

護国山高昌寺は近郷に 24 ケ寺の末寺をもつ曹洞宗寺院。嘉吉元年（1441）、大功円忠大和尚により麓川沿いに開かれた浄久寺を起源とし、天文 2 年（1533）現地に移築された。曾根城主・曾根高昌^{たかしげ}の帰依を受け、その菩提寺として保護されたことから、高昌死後、その諱^{いみな}をとって改称した。江戸期に火事で大部分を焼失したものの、文化 5 年（1808）の再建に際して大洲藩主より楠の巨木が送られたことから別名「伊予の楠寺」と呼ばれる。伽藍の配置は本山永平寺を模しており、特に均整のとれた楼門、唐破風の中雀門、廻廊、三列の石段、坐禅堂、勧学寮などの配置は、近郷の寺では見ることができない。



高昌寺

【とぼしが森三島神社本殿及び拝殿】

（有形文化財（建造物）、内子・大瀬地区）★

永禄 11 年（1568）9 月 13 日、曾根城主・曾根宣高^{のぶたか}が大山祇神社から大山積命^{おおやまずみのみこと}、雷公神^{いかづちのこうのかみ}、高竈神^{たかおのかみ}の三神を勧請して創立したと伝わる。明治 33 年（1900）、現在の三殿から構成される立派な社殿に改築された。華麗な彫刻が数多く施されており、本殿右奥の脇障子の裏面には長州大工の銘がある。



とぼしが森三島神社

【北表三島神社本殿及び拝殿】

（有形文化財（建造物）、五十崎・御祓地区）

古くは喜多郡橘郷と河辺郷の一宮であったとされ、近郷約 10 カ村の大氏神社として信仰されていた。起源は明らかではないが、延宝 4 年（1676）の社殿新築落成の棟札が現存している。明治 19 年（1886）の拝殿、同 31 年（1898）の本殿改築には長州大工も参加している。本殿・拝殿の各所には精巧な彫刻が多数施されており、建物全体があたかも彫刻部材で組み立てられているかのような豪華な造りである。



北表三島神社

【大洲和紙】（無形文化財）★

喜多郡地方の紙業が盛んになったのは、宝暦年間（1751～1764）

と言われる。藩の奨励を受け、専売品となったことにより、藩の収入の約8割を占めるほどであった。明治期に改良半紙への転向と品質の向上が図られ、その後大正初期には五十崎・天神に約50槽の抄舟^{すきふね}を備えた製紙工場が建設され、中期には内山地区の製紙業者は1500軒に増加するなど、最盛期を迎えたが、現在生産を続けているのは2軒のみとなっている。保持団体としては大洲手漉き和紙保存会が認定されている。



大洲和紙

【河内の屋根付き橋】(有形民俗文化財、内子・河内地区) ★

麓川の中流、河内地区本村にある。当初は土橋であったが、台風による水害で流出し、昭和19年(1944)に方杖式構造(橋脚を設けず、護岸側から斜めに支える構造)の木造杉皮葺で新設された。麓川流域で多く見られた屋根付きの木造とし、当地区の景観形成に寄与している。橋長14.1m、幅2.1m、高さ2.9m。通称を「田丸橋」という。橋は清田集落^{せいだ}などへの生活道であり、時には炭俵や農業資材の倉庫代わりとして活用されてきた。現在屋根付き橋は、水害や道路改修により昔から残るものは2件だけとなっている。こうした生活橋としての屋根付き橋は全国的にもまれで、平成14年(2002)に「土木学会選奨土木遺産」を受賞した。



河内の屋根付き橋

【西光寺の大師堂】(有形民俗文化財、内子・五百木地区) ★

五百木地区富長の遍路道沿いに位置する。その昔、光明真言宗西光寺があったところで、寺の名残として巴瓦に西の紋が使われている。創建年代は不明だが、万延元年(1860)五百木村庄屋高橋氏が建て替えを行った記録が残り、それ以前の創建であることがうかがえる。本尊は木造弘法大師坐像である。堂宇は2.7mの方形造で、特に斗拱^{とこう}や蟬股^{かえるまた}の切り組みは精巧である。背面の彫刻の左右や正面格子戸の錠前には16弁の菊紋がある。



西光寺の大師堂

他、有形民俗文化財は「一本松の大師堂」(内子・論田地区)、「元袋口^{もとふろく}の大師堂」(内子・袋口地区)、「滝の花の大師堂」(内子・石畳地区)、「甲影山^{こうかげやま}の観音寺」(内子・大瀬地区)、「宮ノ成の籠松堂」(内子・河内地区) などがある。

【恵美須神版木】

(有形文化財(彫刻)、内子・廿日市地区(恵美須神社)) ★

内子・廿日市地区の恵美須神社に伝わる版木。制作年代は不明。恵美須神社は治承から養和(1177～1182)年間に河野氏が厳島の荒えびすを勧請したことを起源とし、以来、五穀と商売に福德のある神様として崇められてきた。かつては旧暦10月乙亥の日に大祭



恵美須神版木

を行い、御神体を開帳して大市がたったが、昭和 50 年代からは新暦の 11 月 28 日に定められた。版木は祭日に恵美須神のお姿(神札)として刷られ、参拝者に有料で配布される。

【立川神楽】(無形民俗文化財、内子・立川地区) ★

喜多郡一宮三島神社で古来より続けられていた出雲流の神楽を起源とする。享和 2 年(1802)、火災に遭い、社殿が焼失したことから、再建後に「鎮火の舞」を取り入れて行われるようになったと伝わる。明治 36 年(1903)、立川神楽組ができ、舞継がれることになった。大太鼓、小太鼓、手拍子を中心に笛に合わせながら 10 数種類の面と衣装をつけて舞う。すべてを舞うと約 4 時間かかるという。現在は立川神楽保存会として氏子や町内外の協力者 8 人で活動。年間を通じて町内外約 30 カ所で舞を奉納している。



立川神楽

【喜多郡一宮三島神社祭礼行事「しゃぎり」「獅子舞」「御供相撲」】
(無形民俗文化財、内子・立川地区(喜多郡一宮三島神社)) ★

喜多郡一宮三島神社では毎年 10 月 21 日に秋季例大祭が行われており、しゃぎり、獅子舞、御供相撲が奉納されている。いずれも享和 2 年(1802)の社殿火災の後から今日の形で奉納されるようになったと伝わる。しゃぎりは神仏習合の名残とされ、祭りの日の正午、稚児や青年が華やかな衣装をまとって行列し、鳴り物を鳴らしながら鳥居元の御旅所から参道を通り本社へ向かう。しゃぎりの後を御供相撲の力士、獅子舞、神輿、神官、総代、供人が続く。



しゃぎり



獅子舞



御供相撲

御供相撲は男子の健やかな成長を願い、古来の形式で奉納される。鬼、行司、力士 11 人からなり、川中地区の 6～30 歳の男子で構成される。行司の前口上の後、豆力士から横綱力士までが下駄履き姿で土俵入りした後、境内で子ども相撲大会が行われる。

獅子舞はむしろ 8 枚を敷き、その上で演じる庭獅子、囃子・獅子役の大人 10 人、老夫婦、サル、キツネ、狩人、日本人役の小学生 10 人で行う。境内や御旅所、地区内の 4 地域で舞うほか、前日には別宮のおやぶ小敷三島神社にも奉納されている。

【山の神火祭り】(無形民俗文化財、小田・寺村地区) ★

寺村地区の山の神に火を献じ、秋の豊作を祈る祭り。かつては旧暦 7 月 20 日を祭日としていたが、昭和 52 年(1977)から新暦の 8 月 15 日に定められた。現在は 4 地域が輪番でおこなっている。文政 6 年(1823)から記録のある『当番帳』が現存しており、その歴史の古さを伝えている。



山の神火祭り

当日は当番者全員で山の神を祀るろっかくさん六角山の山頂に登り、かね鉦と太鼓に合わせて念仏を唱える。日が暮れるとオヒカリ(蠟燭や松明などに点火したもの)をつけて回る。オヒカ리의数はかつては 108 灯だっ

たが、近年では4,000灯にもなり、幻想的な火祭りの風景を見ようと町内外から多くの人を訪れる。

【中川万歳^{まんざい}】（無形民俗文化財、小田・中川地区）

小田・中川地区に伝わる。松山市の山越万歳の流れをくみ、江戸中期に伝えられたとされる。現在の万歳は大正7年（1918）ごろ、青年たちに伝えられたものが受け継がれている。三味線や太鼓のにぎやかな伴奏に合わせ、何人もの踊り手が手に扇を持って踊る。演目は豊富でコミカルな才藏舞や迫力ある松づくしは代名詞となっている。昭和25年（1950）に中川万歳保存会が結成され、以来保存伝承に努めている。



中川万歳

【龍王城跡】（記念物（史跡）、五十崎地区）★

五十崎盆地と内子盆地を隔てるように西から小田川に向かって突出した丘陵上に位置する中世城郭跡。城主は城戸氏であったが、天正年間（1573~1592）のはじめ頃に土佐の長宗我部元親と組んだ曾根城主・曾根宣高の夜襲に遭い、攻め落とされたと伝わる。



龍王城跡

その後は曾根氏の客将であった河内駿河守吉行が城主となったが、天正13年（1585）、豊臣秀吉の四国征伐に際して小早川隆景に降伏し、廃城となった。

【曾根城跡】（記念物（史跡）、内子・護国地区）★

中山川と麓川に挟まれた城廻地区の丘陵上に位置する中世城郭跡。築城年代は不明だが、山城としては規模が大きく、戦国時代には一帯を支配していた曾根氏の居城であった。



曾根城跡

戦国時代末期には河野氏や長宗我部氏をはじめとする周辺勢力の争いに巻き込まれており、喜多郡の要所であった。天正13年（1585）、豊臣秀吉の四国征伐に際して小早川隆景に降伏し、翌年廃城となった。

【登貴姫^{ときひめ}の墓と八房の梅】（記念物（史跡）、小田・寺村地区）

小田寺村地区の清盛寺^{せいじょうじ}境内にある。当地は小田地区に伝わる平家の落人伝説の舞台で、平清盛の5女・登貴姫が壇之浦の合戦の後、数少ない家来と共に追手の目を逃れて隠れ住んだと伝わる。しかし、姫は文治2年（1186）に病没。供養のため姫のたもとにあった梅の種を墓の傍にまいて供養した。芽を出した梅は八重咲の紅梅であったことから「八房の梅」と呼ばれ、現在も毎年美しい花を咲かせている。



登貴姫の墓と八房の梅

他、記念物（史跡）は、「内子願成寺の宝篋印塔^{ほうきょういんとう}」（内子地区（願成寺））★などがある。

【^{ゆげ}弓削神社の境内】（記念物（名勝）、内子・石畳地区）★

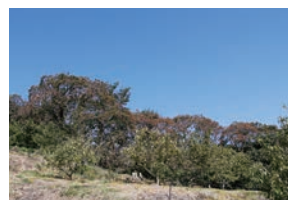
石畳東地区の標高約 410m に位置する。応永 3 年 (1396) 創建と伝わり、天照大神を主神として、ほかに七神を祀る。境内にはシイなどの大木が生い茂り社叢を形成。境内への入り口には農業用水を兼ねたため池があり、屋根付きの太鼓橋が架かっている。



弓削神社

【上立山のハゼノキ群落】（天然記念物、内子・立川地区）

立川地区上立山にある「ハゼノキ群落」。おおよそ 25 本が残る。内子で木蠟生産が行われていたころ、原料となる櫨の栽培と実の収穫は主に山間部の村々の農閑期の副業として行われていた。立川地区でも古くから行われており、上立山では明治期から昭和 20 年 (1945) ごろまで収穫されていた。かつては同様の「ハゼノキ群」が町内に多く存在したが、製蠟業の衰退とともに伐採が進み、現在では数カ所を残すのみとなっている。製蠟業で栄えた往時をしのばせる、貴重な遺産である。



上立山のハゼノキ群落

他、天然記念物は、「^{たかや}高屋のハゼノキ群落」（内子・長田地区）、「中川三島神社の兄弟カヤ」（小田・中川地区）★、「^{あたご}愛宕の大ヒノキ」（小田地区）★などがある。

(5) 国登録文化財

国の登録有形文化財は建造物が 10 件ある。

【^{つづき}都築酒店店舗及び母屋】（登録有形文化財（建造物）、小田地区）★

小田地区の小田中央商店街内に位置する。初代当主・都築九平によって明治 20 年 (1887) に建築された。木造二階建、瓦葺、建築面積 121.5 m²で、街路に面して建ち、大戸口の建具や軒受けもよく残っており、屋内には箱階段を備えている。2 階街路側の半分に手すりを設けて開放的な造りとし、2 階高を高く取るなど、明治期の店舗兼住宅の好例として、平成 15 年 (2003) に登録有形文化財（建造物）となった。



都築酒店

【^{にしいでぜき}論田の西井出堰】（登録有形文化財（建造物）、内子・論田地区）★

^{ふもとがわ}麓川にある農業用取水を目的とした 22 カ所の堰の一つ。下流から 7 番目にあり、松ノ木地区の水田、約 49,000 m²の取水を担っており、22 カ所の堰の中で最も大きな灌漑面積を抱える。築造年は定かではないが、その伝統的な工法などから江戸後期と考えられている。規模は長さ 30 m、高さ 3.3 m。地域の農耕の歴史を語る遺産として、平成 18 年 (2006) に登録有形文化財（建造物）となった。



論田の西井出堰

【上田家石垣】（登録有形文化財（建造物）、内子・袋口地区）★

内子・袋口地区の麓川沿いにある。高さ約6m、長さは約28m、下辺約31mであり細長く割った青石を末広状に空積みしている。中央部分に七つの巨大な青石を並べて埋め込んである点が特徴的である。造りや所有者聞き取りより、屋敷が建てられる以前の江戸後期の築造とされ、表側の石垣の奥にもう一列石垣を重ねた二重構造となっている。当時の建築技術の高さを伝えるとともに地域の歴史的景観を形成しているとして平成18年(2006)に登録有形文化財(建造物)となった。



上田家石垣

【旧下芳我家住宅主屋、隠居屋】

(登録有形文化財（建造物2件）、内子・六日市地区）★

内子・六日市地区に位置する木蠟生産で栄えた本芳我家の分家の住宅。当初は本家同様、製蠟業を営んだが、ほどなく造り酒屋と紙生産に転向したと伝えられている。

母屋の正面には内子では珍しく内に吊り上げる^{しとみど}蔀戸の痕跡があり、本家よりも古い様式が見られる。棟札などが不明なため定かではないが、造りや伝承などから明治中期以前の建築と推察される。隠居屋は、大正末期の建物と伝えられている。部屋ごとに^{しほうまさ}四方桎など吟味した材料を使い、欄間や格子などに遊び心を感じる意匠が施されている。

一部改築はあるものの、当初の姿を良く残しており、明治・大正期の内子・六日市地区の繁栄を今に伝える貴重な建築物として平成19年(2007)に登録有形文化財となった。



下芳我家住宅

【河内家住宅主屋、土蔵、井戸】

(登録有形文化財（建造物3件）、内子・五百木地区）

五百木地区の中山川の東岸に開けた平地に位置する。敷地中央に主屋、南側に井戸屋形、南東に土蔵が建つ。現在地には元は庄屋屋敷があったが、明治期に油の売買と木蠟生産で財を築いた河内家が買い取り、移住したと伝わる。主屋の建築年代は、屋根裏に残る祈祷札から明治27年(1894)頃と考えられる。明治期の内子の豪農の暮らしぶりをうかがい知ることができる、貴重な建築物として平成23年(2011)に登録有形文化財となった。



河内家住宅

【旭館】（登録有形文化財（建造物）、内子・八日市地区）★

重伝建地区の南側に隣接する高岡町の一角に敷地を構える、大正14年(1925)に起工し、翌年10月5日に開館した活動写真館である。建物は木造一部2階建、切妻造、瓦葺、妻入で、西面して建つ。正面の意匠は独特で、壁面部分は洋風、それ以外は和風を基調とする。内部は正面側に舞台、両脇に通路、奥よりに2階客席を設ける。



旭館

大正から昭和初期にかけて新たに開発された高岡町に興行施設の一つとして建築された建物で、内子町の近代的な発展の代表的な施設の一つとして価値が高い。また、地方都市における近代の興行施設建築の一つとして歴史的価値があるとして平成 25 年（2013）に登録有形文化財となった。

【旧二宮製材所事務所兼主屋】（登録有形文化財（建造物）、小田地区）★

昭和 17 年（1942）建築の林家の町家。通りに東面する入母屋造平入棧瓦葺。北に土間、南は東半を一室の事務所、西半は三室続きの座敷とする。二階は建ちを押さえつつ四方に出桁で軒を持ち出し、豪壮にみせる。令和 3 年 10 月 14 日に登録有形文化財となった。



旧二宮製材所事務所兼主屋

(6) 指定文化財・登録文化財以外の主な文化財

内子町では、未指定の文化財についても、地域の歴史や文化を伝える「地域遺産」のことを広く「文化遺産」と表し、風土に息づく文化遺産、歴史を伝える文化遺産、技術を伝える文化遺産、美術品などの暮らしを彩る文化遺産として、平成 27 年（2015）発行の『内子町誌うちこ時草紙Ⅰ文化編』において紹介している。主なものは次のとおりである。

【高橋邸】（内子・中央地区）★

「日本のビール王」と呼ばれる高橋龍太郎の生家である。約 800 坪の敷地の前面に、丸石を使った石垣と土塀が築かれ、正面に木造平屋建、瓦葺の母屋、左に木造二階建、瓦屋根の離れが建つ。建築年代は昭和初期とされる。部屋の配置や窓の取り方など、各所に大工や左官の伝統的な技と工夫を見ることができる。



高橋邸

【栗田家住宅】（五十崎・天神地区）★

栗田家は平岡村の庄屋を務めた家で、当家に伝わる日記等によると建築は明治 29 年（1896）。愛媛県内屈指の農家建築であり、明治期から大正期にかけての豪農の屋敷構えを良好に残し、当時の暮らしぶりを今に伝える、貴重な建築物である。「千俵蔵」と呼ばれたレンガ積の腰壁の米蔵が同時期に建築されている。長州大工の夫婦が住み込みで建てたと伝わる。



栗田家住宅

【村上家住宅】（五十崎・天神地区）★

明治・大正期に製蠟業で財を成した村上家。当家の記録によると大正 13 年（1924）、当主・村上孫吉の時に上棟した。孫吉は進歩的な人物で、村上家住宅は伝統的な間取りをもとに居住性の向上を考慮した造りになっており、大正末期の農村における近代和風住宅の好例と評されている。



村上家住宅

【山竹家養蚕室】（五十崎・重松地区）

大正時代に最盛期を迎えた養蚕業。町内でも多くの家が養蚕に携わっていた。五十崎・重松地区の山竹家は、当時天神村で一番の規模であったといわれており、現在も大正15年(1926)建築の養蚕室が残っている。山の傾斜を利用した3階建て、蚕室の基本的な形はもとより、暖房設備や桑の保管庫、繁忙期のための宿泊室も設けられている。かつての一大産業を物語るものである。



山竹家養蚕室

【酒蔵のある風景】★

自然豊かな山々に囲まれ、小田川の清流に恵まれた内子町は、かつては各地域に酒蔵があった。現在町内には、大正9年(1920)に設立された喜多酒造株式会社を前身とする酒六酒造株式会社の酒蔵がある。この重厚な酒蔵とレンガ造の煙突が並ぶ風景は、旧内子町時代に「内子百景」の一つに選定されている。



酒蔵のある風景

【長州大工の足跡】

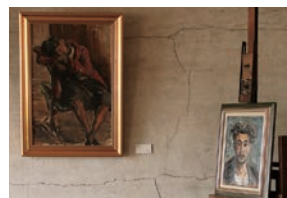
長州大工とは、山口県大島郡屋代島出身の出稼ぎ大工をいう。彼らは海を越えて四国や九州へ渡り、神社仏閣などの建築普請を行った。町内にも長州大工の手によると思われる建造物が多く残る。向拝（社殿や仏殿の正面階段の上に張り出したひさしの部分）の虹梁や木鼻などに施された彫刻のたくましさ、華麗さなどに特徴があるとされ、晩年は社寺建築を飾る彫刻師となった者が多い。



長州大工による彫刻

【上岡美平の絵】

明治43年(1910)五十崎村に生まれた。中学時代から絵画制作に没頭したが、昭和12年(1937)、日中戦争に召集、同年、戦死した。作品はあまり細かい描写は持ち込まず大胆な筆致で深みを出し、素直で力量あふれるのが特徴。大学時代の昭和7年(1932)に春陽会研究所コンクールで一席を獲得。



上岡美平の絵

【和蠟燭づくり】（内子・八日市地区）★

木蠟を主な原料とし、灯心草を和紙に巻き付けてつくった芯に木蠟を何度も手塗りし、乾かす工程を繰り返して年輪状に太らせていく「生掛け製法」でつくられる。内子町は明治期から大正期にかけて、製蠟業で栄えたが、その後安価な西洋蠟燭や電気の普及によって衰退し、木蠟生産の名残を残すのは大森和蠟燭屋の1軒のみである。



和蠟燭づくり

【桐下駄製造】（五十崎・重松地区）

明治末頃から昭和期にかけて内子町での下駄製造は県内でも有数の生産量を誇った。中でも桐下駄が高級とされ、町内でも広くニホンギリが植栽され使用されていた。戦後はしだいに下駄の需要が減少し、下駄製造も衰退したが、現在、昭和23年(1948)創業の宮部木履工場が製造を続け、その技術をつないでいる。



桐下駄製造